
ライダー少女が世界を巡る

alice

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライダー少女が世界を巡る

【Nコード】

N2221V

【作者名】

alice

【あらすじ】

仮面ライダー好きな少女（23歳）がとある「未練」によって「オース」の世界へ行く。というものです。どうぞ見てみてください。

プロローグ(前書き)

はじめまして、作者です。「シャチ・セル」、「ライダー少女」を見ていたら思いついたものです。何か無理があるんじゃないか?と思ったら、どしどしご意見をください。

プロローグ

2011年7月25日午後10:00

T都M市のマンションの一室にて、一人の女がパソコンと格闘していた。

「あゝ、また間違えたあゝ」

どうやら会員登録に手間取っているようだ。

そのサイトの名前は【プレミアムバ ダイ】

おぼろげな手つきで一文字ずつ慎重に打ち込んでいく。

「今度こそ、今度こそ…絶対【シャチ・セル】メダルは、手に入れるんだからね」

彼女の部屋を少し見渡してみよう。モノは散らばってはいない、むしろきれいな部類に入る。がある一角が異様な雰囲気を出していた。壁には、【金属製のベルト】が幾つもかけられていたり、机の上には【剣】【銃】【カード】や【USBメモリ】そして【メダル】が散乱していた。

これらは【仮面ライダー】と呼ばれる作品のキーアイテム【変身ベルト】やそれに付随する【変身アイテム】にあたる【玩具】である。どうやら彼女は【仮面ライダー】が好きな女性のようにだ。

カタッ、カタタッ、カタンッ

キーを打ち込む音が止んだ。

「んん、終わったあゝ!!」

大きく伸びをして、席を立つ。

趣味全快の先ほどのスペースから一本の【ベルト】と黒いケースを掴む。

それを素早く身につけ、慣れた動作でケースから【メダル】を三枚取り出し、ベルトに入れる。

「変身ッ!!」

<タカ><ゴリラ><チーター><ピューーン>…シュリリン>

【仮面ライダーオーズ】が変身する亜種形態【タカゴリーター】に変身したつもりになる。

「……………」

嬉々として【ベルト】を装着したまでは良いが、そこから彼女の表情は曇る。

ベルトとメダルを元の場所に戻し、部屋を出る。

生ぬるいジっとりした空気が彼女にまとわりつく。それを振りほどくかのように彼女は走り出した。

15分ほど走っただろうか、小さな神社の前に彼女はいた。

「はぁ、はぁ……………」

賽銭箱の前に立つと財布から「500円」を取り出し、投げ入れる。

「…………その欲望、解放しろ」

小さく小さくつぶやくと、少し顔を赤らめた。もう深夜なので周りに人はいない。単に恥ずかしかったのだろう。日常生活でそのような言葉を発する者はいないからだ。

パンツ、パンツ

手を合わせ、祈る。

神様、私の声が届いていますか？というかここにいますか？

・・聞いてもしょうがないですけど・・・お願いします。どうか、

どうか・・・

「私を仮面ライダーにして下さい」

そう言い終わった後、彼女は帰るために来た道を引き返す。

いつも通りの日常、嫌気のさす日常、辛いだけだった23年

間の日常…それが

「えッ？」

頭上に迫っていた隕石にぶつかる。という、日常ではほとんどありえない現象で彼女の生涯はプツンと途切れた。

【シャチ・セルメダル】、欲しかったなあ・・・

プロローグ（後書き）

次どうするか、全く決めてないです・・・なるべく早く上げます。

プロローグ2（前書き）

物語をどう動かしているのやら、難しいですね。ちなみにまだ主人公の名前すら決まっています。

プロローグ2

カチツ、カチツ、カチツ

時を刻む針の音で私は目覚めた。

寝ぼけ眼で思考を巡らす・・・神社でお願いごとをして、帰ろうとしたら・・・

「あー、私死んじゃったのかな？」

あまりにも現実離れしているので自身の「死」を認識できない。

「じじ、どじじ？」

初めて自分が神社ではないところにいることに気がつく。

真っ白な部屋？空間？とにかく白一色だった。

「!!!!!!」

背後に人の気配を感じ、振り返ると薄茶色の外套と帽子をかぶった男が立っていた。

男は何をするでもなく、じっと私を見ている。

「何か？」

とくにすることもないので男に話しかけるが・・・

「……………」

無言。うー、辛い……

「……君の望みを叶えよう」

「へ？」

男が突然話し始めた。

その人いわく……

【私は隕石の衝突によって死亡した】 【メダルが欲しい。という残留思念がこの場所に私として留まった】 【私がまた生きかえる？ 為には、その残留思念の欲望≡私自身を満たさなくてはいけない】 【よって私は仮面ライダーオーズの世界に転生？するらしい】 【ただし、その世界にオーズはいないようであればらく代わりとして私が必要のようだ】 【時間軸的に第一話くらい】

「私なんか映司くんの代わりを……」

TVの話だと思ってたのに……でも、まだ死にたくない！

「私やります!!!」

男は、口元で笑顔を作り、私に薄い板を渡した。

「これって、メダルホルダー!？」

中身を確認しようとしたら、ザマーッ……という音とともに白い空間が「黒」に塗りつぶされていく。

「えっ？えっ？」

逃げる間もなく、私は落ちていく。

男は、懐から懐中時計を出し、時間を確認するとどこかへ消えていった。

「……オーズの代わりをよろしくな」

男の、優しい声が耳元に聞こえた気がした。

プロローグ2（後書き）

まだ戦闘に突入しないどころか変身すらしてない。名前も出ていない。ほんと彼女の名前どうしよう。

ちなみに男は、あの人です。眼鏡は掛けてないです。

メダル1 原作介入と怪人と変身と？（前書き）

ようやく物語が動き出します？

メダル1 原作介入と怪人と変身と？

2010年、秋

大企業【鴻上ファウンデーション】が運営している美術館で「それは起こった。

美術品が展示してある部屋の一角。大きな石の箱があった。それは【棺】のようでもあった。

おそらくかなりの年月が経過しているのかとところどころ風化している。

その割れた所からは【銀色のメダル】がこぼれていた。

チャリン・・・

その中から一枚だけ【赤いメダル】が転がってきた。どうやら生物の絵が描いてあるようで、その赤いメダルには【タカ】が描かれていた。

そしてその赤いメダルを中心に銀色のメダルが磁石のようにくっついていき、まるで【手】のような物体になった。

「メダル・・・俺のメダルが無い・・・」

【手】は意志を持っていた。彼の体は【銀色のメダル】と【赤いメダル】で作られているようだ。

「チツ！誰が持つて行きやがった！！」

彼はイラつきながら辺りを浮遊する。すると、棺の割れ目から色をついたメダルを発見する。

色は【緑色のメダル】二枚と【黄色のメダル】一枚だ。

「ほう、【ウヴァ】と【カザリ】のか。俺の【目的】のために貰っておくか」

彼の体〓手が次第にはつきりしてきた。

鋭い猛禽類のような爪、赤い装甲のような腕、装飾として【色鮮やかな鳥】がつけられている。

「さて、【あいつ等】を起こすとするか。800年ぶりの再会だな・・・」

そう言つて彼は、棺の中心にある石板を動かした。

「長居はできないな、おれも逃げるとするか！！」

彼がその場から消えた数秒後に棺は銀色のメダルに姿を変えた。その枚数は1000や2000ではない。

それどころかその塊は4つに分散し、先ほどの彼と同じように色を帯びていった。

敵を切り裂く刃、鎧のように堅そうな鋼皮、昆虫を模したような頭
の生命体 【ウヴァ】

獲物を仕留める必殺の爪、メタルジャケットのような鎧、百獣の王を思わせるタテガミの生命体 【カザリ】

その身の重量で踏み砕く巨脚、巨獣を思わせる角と鼻を持った生命体 【ガメル】

魚を模した頭部に、ヒレのついた体を持った水生生物を思わせる生命体 【メズール】

彼らは欲望の怪人【グリード】 その身に宿す【欲望】は、世界をも飲み込む。

しかし彼らの体は、一部一部が欠損している。

「あれ？おれの体、変だ？」

「足りない、それも【コア】が・・・」

「【アंक】が持って行ったんじゃ？」

「ウオオオオオー！！！！」

彼らは4方向に散らばりメダルになって飛んでいく。

【アंक】の搜索および【コアメダルの奪取】・・・そして人間の

【欲望】を喰らう為に・・・

メダル1 原作介入と怪人と変身と？（後書き）

なかなか時間が取れなくて、打ち込む時間もないですね。仕事との両立は難しいです。しかも短文ですしね。本来なら一話終了まで話を持って行きたかった。

構成は大体終わっているのではと打ち込むだけです。若干原作とは違った方向に進むと思いますが、ご了承ください。

読んでくださっている皆さんにはご迷惑をおかけします。

メダル1 原作介入と怪人と変身と？（前書き）

今回は少し長いかな？今回も変身はないです。

メダル1 原作介入と怪人と変身と？

美術館でグリードが復活した時、彼女は街の真ん中に立ちつくしていた。

「なんかすっごいダルイんだけど・・・ここ、どこ？」

たしか【オーズ】の舞台は【夢見町】とか40話くらいで出たような気がしたけど・・・

キィィィン

「!!!!」

頭が痛くなるような、耳の奥から聞こえてくる不快な金属音

「グリードが復活した？」

ヤミーが誕生していない時点で、この音がしたということは「それ」しかないんだろう

「ほんとに私に映司君の代わりが出来るのかな？」

チャリン

後ろからメダルの落ちる音が聞こえる

背後には赤いメダル【タカ】コアメダルが落ちていた。

「・・・そっか、私が美術館に居なかったからここに落ちてきたのかな？」

そのメダルを拾うとふと思い出した。

「あ、メダルホルダー貰ったんだっけ？」

【メダルホルダー】を開くと、原作では（今のところ）登場していないメダルが入っていた。

「これって、児童誌についてきた・・・」

【パンダ】と【カンガルー】が二枚ずつ入っていた。

「あとはセルメダルか・・・しょうが㇏」

原作に忠実に再現しなきゃいけないなら、と思っていたら【メダルホルダー】から4枚の【コアメダル】が私の周りを回りだし・・・

「グッ・・・」

勢いよく私の中に入った。

幸いなのか、不幸なのか、私の周りに人はいるが、まるで目に入っていない。

き、k・・・

「!?!?!」

私の内側から声がする。

今の君の体は、【欲望】にしがみついているだけの【亡霊】だ。だが、【コアメダル】にその【自我】を乗り移らせることで、君は【グリード】もどきになれる。ちなみに今の状態のままなら、あと一時間も持たないだろうね。さて、【オーズ】になる前に消滅するか、【グリード】もどきになって【役目】を果たすか・・・まあ、一択しかないがね。

「・・・誰？（声は【右側】の人っぽいんだけどな・・・）」

まあ、誰でもいいだろ？話を戻そう。【グリード】もどきになったら、君は【セルメダル】か【コアメダル】を定期的に補充しないと【体】が維持できなくなる。そして【本能】が出てくる。

「私の【本能】？」

【生存本能】のことだ。【オーズ】や【他のライダー】もよく暴走していたらどう？君の場合は、【セルメダル】が一定枚数以下もしくは【コアメダル】を奪われることで【暴走】しやすくなる。だから、4枚の【コア】を渡したのさ。・・・出所は言えないけどね。

「ふーん、そう・・・ううう！！」

我慢してたけど、だいぶ苦しくなってきた。

君の体が【変化】しているんだ。この【世界】に来た時に体の変調は無かったかな？

「そう言えば、頭痛とかあった。」

それだね。あと少しで君の体は、【グリッド】と同じように【コア】を中心とした【セルメダル】の塊で形成されるよ。

「……私に拒否権は無いんですね。」

残念ながらね。僕も一時期実体が無かったから気持ちはわかるよ。……話を戻そう。もう時間が無いから……。

「本当に、ファイア」

言っでは駄目だ！この【世界】への干渉は避けるように【彼】から言われているんだから……

「【彼】？」

……悪いね、こら……はい、え……い……

響いていた声にノイズが入ってくる。

最後だ。絶対に【コア】と【セル】を奪われてはいけないよ。【僕】から言えるのはここまでだ。チャンスがあったら、また連絡するよ。【僕らがね】……

その会話？を最後に【彼】の声は聞こえなくなってしまった。

それと同時に胸を締め付けるような感覚も戻ってきた。

「うっそ……すぐ、おさ……まる、って……」

額から脂汗がにじむ。

「こんなん、【コンボ】とか耐えられるかな、私……」

そんな余計な心配をしながらうずくまっっていると……

「おい、大丈夫か?!」

男の人に声をかけられた。

あれ、この人……

「おい、【泉】どうし!? お嬢ちゃん大丈夫か?」

そっだ、【泉信吾】さんと、一話に出てきた上司……あ、【森沢篤】さんだっけ?

「とりあえず病院に行こう、君……【名前】は?」

「……私は」

ガッシャーン!!!

「「「!!!!!!」」」

3人は、音のするほうを向く

「キャー!!!!!!」

悲鳴とともに、カマキリに似た怪人・・・カマキリヤミーがそこに立っていた。

「メダル・・・アंकから、奪う!!」

カマキリヤミーはとんでもない跳躍でビルからビルへ飛び移るように消えていった。

「何だ、アレは!？」

「泉、追うぞ!!」

「はいッ!!」

二人は止めてあつたパトカーに走る。

「・・・行かなきゃ、私も・・・」

ボタンッ!!

「!!何をやっているんだ!!」

「あれを追ってください!!」

「君はおりたまえ!!危険だろう!!」

「早く追わないと被害が広がりますよ!!?」

「~~~~泉、出せ!!」

「しかしッ!!」

「いいから!!」

腑に落ちない気持ちで、泉はアクセルを踏む

「（泉さん、ごめんなさい）・・・でも、行かないと・・・」

パトカーは遙か彼方にいる【怪人】を追うため、さらにスピードを上げた。

メダル1 原作介入と怪人と変身と？（後書き）

今日バーベキューで飲みすぎてふわふわしているので、誤字脱字があるかもしれません。とりあえず次回までにタトバを出したい。

メダル1 原作介入と怪人と変身と？（前書き）

初の連続投稿です。PVとかユニークとか他の作家さんのを見て自分のアクセス解析を見たら、自分もの100を超えていたのでビックリ！みなさんありがとうございます！！

メダル1 原作介入と怪人と変身と？

遊園地、「楽しさ」を売る夢の場所である。

が、今ここはそんな夢のかけらさえも感じられない状態になっていた。

瓦礫と炎に塗れた惨劇を実現したような感じだ。

「・・・酷い」

私はただ一言言った。私はテレビの前の【特撮】としてでしか取られなかった。

けれど、今は、この世界は現実に存在している。

幸い全員避難は終了している。

「何だ、あの化け物は！」

近くで見るとその不気味さがありありとわかる。黄緑色の体に、カマキリを模したであろう、【二対の鎌】・・・人の欲望から生まれる【ヤミー】

「ウヴアのヤミーか・・・」

カマキリヤミーの近くに赤い腕が浮遊している。

「あれは、アंक・・・ほんとに浮いている」

着眼点が少しずれている私。

「泉！奴を倒すぞ！！！」

「ハイ！！！」

懐から拳銃を取り出し、引き金を引く。

「駄目、そんなのじゃ・・・！！！」

パンツ　パンツ　パンツ……………

銃声が止む、それと同時に飛んでくる衝撃刃（波）

音もなくパトカーが切断される

「うわぁッ！！！」

「ぐう！！！」

二人は余波に吹き飛ばされて、瓦礫に激突する

怪我の状態は、素人の私が見ても酷い

ギリッ……

無力だ、今の私は……そう【今】は……

「うわぁー！！！」

勢いに任せて拳銃を乱射する

パンツ　パンツ　ガキッ　ガチンッ・・・

残弾は打ち切った。あとは死なないために!!

「おい、そこの腕!!」

アंकを掴んで逃げる

「待て!人間!!」

カマキリヤミーは、再度真空の刃を私に向かって放つ

「おい、お前!離せ!!」

アंकも私の手の中でもがく。が、私はしっかりとアंकを握る。

私が【オーズ】になれなければ、この世界はグリードに支配される!

ドスッ・・・チャリリリン・・・

「!!」

カマキリヤミーとアंकの動きが止まる。それもそうだろう。

「・・・痛っ」

血は出ない。その代わりに出てきたものは【セルメダル】

「お前、人間じゃないのか!？」

アंकが私に問う

「……アイツ、倒せる方法教えてくれたら話してあげてもいいよ」

不敵に笑う私、難色を示すアंक

「……お前、名前は？」

さて、どうなるかな？

「……私の名前は、【日向井 奈々】（ひむかい なな）だ。」

そういえば、この世界に来て初めて名乗ったな。自分の名前なのに・

「奈々か。良いだろう、あいつを倒せる力をやるよ!」

アंकの腕（今のところ本体?）から長方形の石板が出てくる

「それにこれも貸してやる!」

石板状態の【オーズドライバー】と黄色のメダル【トラコア】と緑色のメダル【バッタコア】を貰う。

アंकが私の腰に石板をかざすと本来の姿に戻り、ヘルトを形成する。

「……二枚だけ？穴は三つだけ？」

「……タカコア持つてるけど一応聞く

「それしか持ってない！！」

まあ、そうですね……

「さて、カマキリヤミー。今から君を倒すよ！！」

「止める。それは封印の……」

カマキリヤミーが慌てだす

「そうだね、危険なものなんだろうね……」

そう言いながら、真ん中にトラコア、左側にバッタコアを入れる。

「原作では一番優しいヤミーだと思ってるよ、ありがとう」

彼らに聞こえないようにつぶやくと、ポケットからタカコアを取り出す。

「！！お前、なんで俺のコアを持っている！！」

話してあげてもいいけど、そろそろ変身させてよ

・今の私は目の前に餌を置かれて待てをされている犬のようなもの……

映司君と同じようにタカコアを指ではじく

「ここから・・・」

タカコアをキャッチして、ベルトの右側に入れる。一瞬三枚のメダルが共鳴するかのように輝く。

「ッ、これを使え！」

一気に不機嫌になったのか、右側の【オースキャナー】を投げよこす。

ギューン、ギューン、ギューン

さあ、行こう。ここから先は原作にはない・・・

「ここから私の物語が始まるんだ！！【変身】！！！！」

歴代の【ライダー】達が数多くの感情をこめて叫んだであろう、このセリフ。言えた。それだけで、私は感無量だった。

【タカ】 【トラ】 【バッタ】 タ・ト・バ タトバ
ト・バ

串田ボイスが変身終了を告げる。

鷹の超視力を備えた緑の複眼、虎の鋭い爪を持った黄色の腕、飛蝗の跳躍力を秘めた緑色の脚

【仮面ライダーオーズ タトバコンボ】がここに誕生した。

メダル1 原作介入と怪人と変身と？（後書き）

ようやく変身完了しました。長かった。てか鴻上さん出てないけど良いんだろつか？というかあの人のハイテンション具合を文章化することができるとはだろうか？

次回カマキリヤミー撃破とアंक憑依とタカカンいっぱいまで書けたらOKかな？

また時間空くかもしれませんがお待ちください。

メダル1 原作介入と怪人と変身と？（前書き）

まだ戦闘もしていない状態でも見てくださる方々がいることで僕は満足です。

メダル1 原作介入と怪人と変身と？

変身した体をぺたぺた触る。

「私も、ライダーになれた」

視界は良好、強くカマキリヤミーを睨めればメダルの位置すら見えるほど……（でもコアはないか、あたりまえだけど……）

「オーズ……コアメダルを寄こせ！！」

カマキリヤミーが突っ込んでくる

私は脚に力を込める。胸部の【オーリングサークル】から【ラインドライブ】を通じて【バッタ】の力が流れ込んでくる。

それをギリギリまで溜め込む。

迫る刃、【タカ】の超視力でメダルの薄い部分を視る。

「そこだ！おりゃあー！！！！」

バネの要領で飛び跳ねる、俗に言うヤクザキックだ。

「ぐうううう！！！！」

チャリン、チャリリン、チャリン……

カマキリヤミーから大量のメダルがこぼれおちる。

「このままたたみかけるか!!」

腕に力を込めると【トラアーム】から【トラクロ】が展開される。

「ハアアアー!!」

切る、斬る、斬り裂く!!

さらに飛び散るメダル、かなりのメダルを無くしたのかフラフラしているカマキリヤミー

「奈々あ！真ん中をこいつに変える！一気に決めてやれ!!」

空気と化していたアングが【黄緑色のメダル】を投げってくる。

「おお、ナイスパス!!」

ほんとお前は、ピッチャーでもやったほうが良いんじゃないのか？

せつかく【カマキリコア】を貰ったので、入れ替える。

「再変身・・・超変身・・・亜種変身・・・なんて言おうか??」

アングに問いかける。

「んなこといいから、さっさと入れ替える!!」

アングの怒声が飛ぶ

「メダルの雨だねえ」

空を見上げる私、綺麗な青空だ！！

「良いからメダル拾え！！」

アंकが降り注ぐメダルを飲みこんでいく・・・表現として正しいのか？

「あ、泉さん！！・・・と森沢さん！！」

どうやら森沢さんは、見た目こそ酷いものの心臓は動いている。

問題は、泉さんだ・・・

「心音が、弱い・・・」

どうするべきか、このまま病院へ連れて行けばもしかしたらアंकが憑依しなくても助かるかも・・・

しかしここから病院までどう行くべきか、オーズの姿をさらすわけにはいかない・・・さらしたとしても【チーター】が無い以上短時間で連れて行けるわけがない・・・

「どうしよう・・・」

「さっさとメダル拾えって言ってるだろ！！」

後ろからアंकが小突かれる

「痛ったあ……」

「ん？……この人間、使えるか……死にかかっているし、ちょうど良い！」

「あ、ちよつとー！」

良いことなのか、悪いことなのかアंकが憑依してしまった……

「うん、こっちのほう都合が良い」

自身の体を見て、ご満悦のようだ。

「これでこの人間は、俺が憑いている間は大丈夫だろ。おい、メダル拾うぞー！」

「……わかったよ」

しびしびセルメダルを拾う。

足りナイ……

「！……！」

辺りを見渡すが、泉刑事の体でメダルを拾っているアंकしかない。……実にシユールだ。

【私】ガ満タサレナイ……欲シイ、モット【メダル】ガ！

！！

私が【私】で無くなる感じ・・・意識が遠のく・・・

「・・・奈々？おい、どうして・・・！！！！」

アंकが距離をとる。

「・・・お前、【誰】だ？」

アंकがオーズを睨む。

緑色の複眼が【黒】に染まっていく・・・

その時、赤い物体がアंकとオーズに向かって飛んでくる

タカカン

その口にセルメダルを啜えていく・・・

その光景を見たオーズは叫ぶ！！

「私ノ【めだる】ヲ奪ウナアアアー！！」

バツタで跳躍し、カマキリソードで一匹残らず切り裂いていく。

メダルとタカカンの残骸が空から降り注いでいく。

「ッ！！！！」

柱の陰から一人の男が舌打ちをした。

急いで、止めてあったバイクにまたがるとその場を去って行った。

「はあ、はあ、はあ……」

斜めを向けていたベルトを並行に戻す

淡い光とともに元の姿に戻る。

顔色は青を通り越して白、全身から脂汗がにじんでいる……

膝が折れ、その場に倒れる

「……こんなに体力を消耗するなんて……」

いや、体力ではない。

体を維持するためのセルメダルを消耗したのだ

「メダル……欲しい……」

このままでは消えてしまう……そんなのは嫌だ

「……お前、本当に何だ？」

アंकクが私を見降ろす

「……自分でもわかんないよ」

力なく答えることしかできない。ほんとに話さなきゃいけないことがいっぱいあると思うけど……

「・・・チツ！全部はやらねえからな！！今回だけだ！！！」

アंकはそっぽを向きながら右腕から大量のセルメダルを奈々の体の上にかけていく。

徐々にだが体が軽くなっていく気がする・・・

「アंक、ありが・・・」

お礼もちゃんと言えずに本日二度目のブラックアウトをするのであった。

「・・・【今回】のオーズは、世話が焼けるな・・・それにこんなところで消えてもらっても困るがな・・・」

ため息をつくとき、奈々を背負いその場を後にした。

・・・ちなみに森沢さんは、【誰か】の通報により無事に病院に搬送された。

メダル1 原作介入と怪人と変身と？（後書き）

ようやく一話終了ですね。次回は鴻上さん率いるファウンデーショ
ンの方々と比奈ちゃん出るかな？

【設定】（前書き）

という名の逃げです。時間ください……。あと累計PV2500
超えました。ありがとうございます!!!

2011年9月5日ちよつとずつ変更していきます。ガチャガチャ
でシャチセルメダル出たんで、私の欲望は叶っていました……。近
くの子供にあげちゃいましたけどね……。ちよつとバレ（大したこ
とじゃないです）入りますので物語を楽しみたい方は、バックして
ください（そういうの書かない方が良いと思われる場合は、感想な
どで書いてください……。消します）

【設定】

主人公：日向井奈々（ひむかい なな）・・・23歳 元美容師見習い T都M市在住

実家が美容室であることと、【555】のヒロインに憧れて一流の美容師を目指す、予想以上に厳しい現実と体への負担（手荒れや腰痛）が大きいことに挫折。以後は、アルバイトと母親からの仕送りで生活している。が、小さいころからの【正義の味方】への強い憧れから、ライダーグッズを集めるようになる。

体格は平均的な女性体型（ウェストは、変身ベルトが巻けるくらい）髪色はカツパー 髪型は背中くらいのポニーテール。

玩具でシャチセルメダルが出ないことに腹を立てながらも、なれないうパソコンでコンプリートセレクションを注文。日課の神頼みの最中に隕石と衝突して死亡。

謎の空間で再度チャンスを与えられ、オーズの代わりとして転生する。

転生後は、グリッドもどきとなる（映司と違うのは、【五感が鈍ってない】）【セルメダルを定期的に摂取しないと崩壊の危険がある】【コアメダルに乗り移ることができる＝現在パンダコア】【変身すると体力ではなくセルメダルを消費する】ということ。

現在奈々の使えるメダルは、パンダ2枚、カンガルー2枚（パンダ1枚は意志持ちである）

パンダコア（cv後藤沙緒里）
ボクッ娘です。

【設定】（後書き）

設定なのか、メモ書き程度なのか・・・
ふーん。と鼻で笑うくらいにとどめといってください。
キャストボイスは、私の趣味ですw

メダル2 妹と自販機と幹部怪人と？（前書き）

森沢さんは同僚らしいですね、この物語では上司にします。
あと短いかも・・・

メダル2 妹と自販機と幹部怪人と？

【カウント・ザ・メダルズ】

現在、奈々が使えるメダルは・・・タカ、パンダ×1、カンガルー×2（現在【パンダ】に乗り移ってます）

現在、アंकが持っているメダルは、タカ（自我アリ）、トラ、カマキリ、バツタ

夢見町を含め、知らない人はいない大企業【鴻上ファウンデーション】

その社長室ですつと【オーズ】を見ている人たちがいた。

「会長、【タカカン】による回収量はゼロです、というか赤字です」

ロングヘアにビジネススタイルの女性、【里中エリカ】が雇い主である【社長】に対して言った。そこに驚きや苛立ちは無く、あくまで【業務的】であった。

「・・・・・・・・」

【会長】と呼ばれた人物、【鴻上光生】は現在の感情を表には出さず、ジッと画面に映る少女と男を見ていた。

鴻上の机の上には、【ハッピーバースデー・オーズ（英語）】とチヨコペンで書かれたケーキが置いてあった。

「里中君、【後藤】君はまだ戻らんのかね？」

画面を見ながら、この場にはいない男の名を呼んだ。

「はい、後藤さんは現在オーズのもとを離れ、こちらに戻っている
とのことですよ。」

里中は、化粧をしながら言った。

「後藤君に【例のモノ】を持ってオーズに接触するように伝えてく
れないか」

「わかりました」

化粧を止め、携帯を取り出しプッシュボタンを押す。

「そつだ、こう付け加えてくれ・・・」

渡すか、渡さないかの判断は・・・君に委ねる、とね

「わかりました、失礼します」

携帯と自身の化粧グッズを持って部屋を退室する。

里中が出て行ったあと、鴻上はもう一度モニターに目をやり・・・

「さて、このケーキの処理は誰にお願いしようかな・・・」

今はケーキを口にできる気分ではなかった・・・

起きろ

誰かの言葉が聞こえる、うーん・・・眠いからあと五分だけ・・・

・・・良いから起きろお！！

うお、実力行使か！！というか私布団かぶってないし・・・

ようやく起きたか

・・・大体声でわかるんですが、どちら様ですか？

俺に質問をするなあ！！！！

【振り切る人】、来たあー！！！！あ、ご結婚おめでとーございます。

ああ、ありがて・・・ではなくでなあ！？

話の腰を折る人ですいません

【アイツ】からの伝言だ、【質問】せずに聞けよ！？

・・・・・・はあい

間あ、その【間】はなんだあー！！

まあ、気にしな

・・・もう良い、俺が疲れる・・・

コンボを使うときの注意点を言いに来た。コンボを使うときは、そのコンボに使う三枚のコアのうち、どれか一枚を体の中に入れておけ

・・・なんd

質問をするなあ・・・

横暴だあー、自分の体のことなのに！！

そうすることで、先ほどの戦闘のときみたいな【暴走】が起
こらない・・・

さっき？

フラッシュバックする、タカカン大虐殺のシーン

タカちゃん、ゴメンネーーーー！！！！

あと、極力だがあの【二枚】のコアを使うなよ。奪われたら、
セルメダルの比ではないからな

そうだ、変身解除したらセルが激減したんだ・・・

あれでも軽減されているんだ。別のコアを取り込むか、欲望
を叶えることでセルが増える。ヤミーは作れないからな。・・・時
間のようにだ。

アキちゃんによろしく

お前を【】というゴールに送ってやるう……

いやあー、やめてえー……ごめんなさあーい……

ゴールに送られたような強い衝撃と消毒液の匂いで目を覚ました。

「ここは……病院？」

脚にはしっかりと包帯が巻いてある。

「よじやく、お目覚めか……」

声のするほうを振りかえると、アंकがいた

「アंक……、あなたがここに？」

「悪いか？」

そっぽを向きながら、舌打ちをする。

「（やっぱりツンデレなのかしら？）」

あらぬ心配をする私だった。

「さて、お前が何者であるかを話してもらわないとなあ……」

アंकが右腕を本来の姿に戻し、詰め寄る

「……何から話していいのやら……」

〈少女説明中〉

「人間がグリードになっただと!？」

「半分ね？」

アंकが驚いたように頭を抱える。

「半分でも同じだ!!じゃあ、コアが抜き取られたらお前は【消える】のか？」

うーん、残留思念だからなあ。むしろ私自身が私の体のことを分かってないから答えにくいなあ。

「奪っちゃだめだよ!? 私死にたくないし……」

「はんッ、使えないと思ったら……俺が消してやるさ……」

ちよっと低い声でアंकが言った。これがグリードの本気……右

腕だけど・・・

・・・、知りませんか？私の・・・なんです。

ああ、その人ならその部屋の中に・・・

「ん？外から聞いた声が・・・」

なんか嫌な予感・・・

「お兄ちゃん！！！！」

ものすごい勢いで、一人の女性が入ってくる

「ああ?!」

怪訝な顔をするアंक&驚愕な顔をする私

「比奈ちゃん、来ちゃったアー！！！！」

とある病院の個室にオーズサイド、ほぼ終結？というか比奈ちゃん、ノックしようよ・・・

メダル2 妹と自販機と幹部怪人と？（後書き）

ハッピーバースデー!!!という鴻上のセリフが書けなかった・
・。あの人が扱っていいかわからないんだもの・。次回は、ヤ
ミー出現まで書けるといいなあ・。またちよつとだけ時間貰い
ます!!!

メダル2 妹と自販機と幹部怪人と？（前書き）

遅くなりました。【基本的に原作に沿う】としましたが、少しだけオリジナル（という名の二番煎じ）させていただきます・・・やっ
た人いるかわかりませんが・・・。

メダル2 妹と自販機と幹部怪人と？

病室は静まり返っている・・・というか【黒いコア】も真っ青になるくらいの【黒いオーラ】がある少女から出ているからである・・・

その少女の名は、泉比奈。仮面ライダーオーズのヒロイン的な役どころ（ほぼ終盤からですがね）そんな劇中の彼女からは想像もできないような真っ黒い波動が、私日向井奈々わたくしに叩きつけられております・・・

誰か、助けてくださいーい・・・え、アंक？ああ、彼なら・・・

【前回からの続き】

「比奈ちゃん、来ちゃったアー！！！」

ここを病院だということを忘れて叫ぶ私・・・あとで怒られるかなあ・・・

「お兄ちゃん（ハア）、お兄ちゃん、お兄ちゃん（ハア、ハア）！！！！！！！！！！」

えー、なんか危ないんだけど！？この世界の比奈ちゃんって・・・重度のブラコンなのー！！あ、アंकが若干引いてる・・・

「おいー！！何だ、この女アー！！！」

アंकが生存本能（あるか知らないけど）で感じ取った危機的な【なにか】

病室内の気温が急激に下がっていくのが分かる。まるで、【紫のメダル】の力が覚醒したかのような・・・

「あなた、誰？」

【最初に戻る】

「えーつと・・・」

黒い笑みを浮かべている比奈ちゃん（黒比奈と命名しよう）を前にして冷や汗が止まらない私・・・

「お兄ちゃんとうとういう関係なのかな？かな？」

眼がランランと輝いている。まるで獲物を見つけたかのような嬉々とした眼。

ああ、私が一体何をしたのです、確かに【シャチ・セル】欲しいと思いましたが、こんな怖い思いをしたくはありません！！

「さあ、どうなんですか？」

この一言が、私の明暗を分ける。というか原作と明らかに違うルートですよね!？

「・・・だんまり、ですか？」

笑みが消えた・・・こんな恐怖、対カマキリヤミーとでもなかったのに

「お兄ちゃんの、何!!!!!!」

比奈ちゃんの怒声が響く。てか看護婦エ・・・

誰でもいいです、グリッドでも良いですから助けてエ・・・

チャリ、チャリ、チャリリ・・・

「!!!!!!!!!!!!!!」

耳の奥から聞こえるメダルの音、天の助け来たあー!!!!!!

さっきまで【堕ちてた】アंकも起き上がり、私を見る

「おい、奈々!!!!ヤミーだ!!!!!!」

「りょーかい!!!!!!」

比奈ちゃんの押しつぶされるようなオーラを気合いで抜け、アंकの後を追う

「お兄ちゃん!?!?!どっくの!!!!!!」

比奈も二人の後を追う。怒りの感情を秘めたまま・・・

病院を出て、五分ほど走っただろうか

町中に白ヤミーがいた。何をするわけでもなくうろつくと・・・

「いた、ヤミーだ!!」

「ぜんぜん育ってないな、もう少し待て」

アंकにメダルを貰おうと思った左手が止まる。

「え!!!?倒さないの?」

「馬鹿か、メダルが貯まってないのに倒す馬鹿がどこにいる!!」

とりあえず右手を上げる私、アंकの眉間の皺溝がいつもよりも深くなる。

「俺の【完全復活】の為なんだよ!!メダルがいるんだ!!!お前の体だってそうだろ!!!!!!」

ズキッ

心が痛む、人の欲望を取り込まないと、私は・・・

「【私】を【維持】できない・・・」

懐に入っているオーズドライバーを取り出すのをやめた・・・

「そつだ!俺たちは【グリード】、欲望でできた化け物だ!欲望を喰らうだけのな!!」

アングの発言に私は、立ち尽くすしかなかった・・・

メダル2 妹と自販機と幹部怪人と？（後書き）

比奈ちゃん大好きな人ごめんなさい。彼女もどうしていいかわからない人・・・多分話が進めば戻ってくると思うよ・・・

メダル2 妹と自販機と幹部怪人と？（前書き）

時間があるときに書きちゃおう！な連続投稿！！

メダル2 妹と自販機と幹部怪人と？

あれから、どれほど時間が経っただろうか・・・

成人男性くらいの大きさだった【オトシブミヤミー】は、いまや10mほどに成長している。

「だいぶ育ったなあ・・・」

アングが上出来とでも言いたげな表情でヤミーを見る

「アング、もう・・・」

もう十分じゃない？・・・そう言いたかったが、言葉が出ない

「もっとだ、もっと・・・稼げるうちに稼いでおかないとなあ・・・」

右腕を変化させ、強く握る

「完全復活の為にッ・・・！！！！」

この間に、私はたくさんの方が傷ついていく様を・・・ただ見ていた

【オーズ】の力を、【仮面ライダー】の力を持っているのに・・・

自分が生きるためとはいえ、他の関係ない人の悲鳴を聞いて何にもしない・・・

「アंकク……」

蚊の鳴くような声で、アंकクに呼び掛ける

「もっと喰え、欲望を……」

「アंकク……!」

さっきよりも強い声で、なるべく低い声で【彼】に呼び掛ける

「ああ？なんd」

ゴスッ

鈍い音、【彼】に突き刺さる右拳、射抜くような怒りの眼

「おい……何の真似だ……」

右腕を掴まれる、力を入れられているのだろう、筋肉が悲鳴を上げている、他人を殴ったことなんてないから右拳から血が出ている（彼の血かもしれないけど……）

「もう良いよね、十分だよね、もう……」

耐えられないんだけど……

私の【中】から【水色】と【黄色】、そして【赤】の波動が放たれる

「グッ……うわぁッ!……!」

衝撃に負けて、吹き飛ばされるアंक。本体である右腕が強く当たったせいか、【トラ】と【バッタ】が転がってくる。

「あゝア!!!」

素早く手を伸ばすが・・・

「遅いよ、そんなんじゃない・・・【届かない】・・・」

オーズドライバーをセット、体内から【タカ】を出す

「返せ！そいつは、俺のだぞ!!!」

右腕が眼前に迫る、が怖くない・・・

「【完全復活】するまで貸してもらおうよ・・・いるんでしょう？【手駒】が？」

アंकは、舌打ち（右腕でどうやってるんだろっね）すると、泉さんの体に戻っていく

「絶対返せよ!!!あと俺の言うことは聞けよ!!!」

私を指さしながら、怒りの表情で約束を交わそうとするアंक

「なるべくね！変身!!!」

それをやんわりとスルーして、タトバコンボへと変身する

向かうは、さっきよりも+2mほどアップ（タカ能力使用）したヤ

ミーへ

「ツたく・・・奈々といい、【アイツ】といい・・・」

仮面ライダーって奴は・・・

悪態をつきながら、しかし笑みがこぼれるアंक

まるで、何かを懐かしんでいるように・・・

「お兄ちゃ・・・ん！！その腕・・・」

後ろを振り返ると、比奈がそこに立っていた

「・・・失敗したなあ・・・」

「ハアアアアアアアー！！！」

・
トラクロ をヤミー切り裂くが、大したダメージを与えられない・・・

派手にメダルは飛び散ってるけどね・・・

苦しんでいる素振りはない、どっちかというと暴走に近い・・・

「欲望の暴走ほど見苦しいものは無い、か・・・」

・ バッタレッグの力で最大限飛び跳ね、トラアームの力で切り裂く・

「あゝ、アンカー！！カマキリ・・・」

・ アンクにカマキリコアを貸してもらえば、少しは楽になるだろう・
・ そう思っ て声をかけた（地上13Fくらいの高さから）んだけど・
・

「ちょっと、お兄ちゃんから離れて！！」

「引つ張んな！千切れるだろうがア！！！！」

上も戦場なら下も戦場だわ・・・

「アンクさーん！カマキリプリーズ！！！！」

できるだけ大きな声で声をかける

「ッ！女ア、ちょっとどけ！！！！奈々！無くすんじゃないぞ！！！！」

・ アンクがカマキリコアを投げる。私はトラコアを外す。そして比奈
・ ちゃんがカマキリコアを奪う！？

「「はああああ！？」」

・ ちょっとあの娘、何やってんの！？

「お兄ちゃんをおかしくしたのは、あなたのせいなのね!!」

あー、声で私って分かっちゃったのね・・・

「!!!!!!奈々あ!!!!!!後ろだ!!!!!!」

アंकに声をかけられた瞬間に私の体は空の上でした・・・

「あー、ヤミーの自重でビル崩れるとか・・・」

ないわ・・・オトシブミヤミーと一緒に空中散歩と洒落込みますか・・・

「とか、考えてる前にこの高さは本気で死ぬかも・・・」

瓦礫とヤミーとともに落下しながら、楽観的なことを考えている私だった。

メダル2 妹と自販機と幹部怪人と？（後書き）

今回は、書いててあまり面白くなかった・・・というか比奈ちゃんが
がとつても動かしづらい・・・次回はアレとあの人と幹部を出すと
ころまで書き切りたい。とか考えている作者です。

メダル2 妹と自販機と幹部怪人と？（前書き）

書き溜めとかじゃないけど、先に書き起こしておくのも悪くないかもね。時間があるときに出していきましょー！……な本日3回目の更新です。

メダル2 妹と自販機と幹部怪人と？

落下していくオーズ!! 奈々

「ッ何か手は無いのか!！」

せめて自分のコアが足りていれば!!!

「え? 何あの大きいの!？」

比奈は、現状が把握できてないせいかわたわたとするだけだ・・・

こうしている間にも、地面との距離はぐんぐん縮まってい

「タコカン」

かわいさをアピールしたような電子音が聞こえる

アंकはハツとした表情を浮かべ、後ろを見る

自販機の前に立つ一人の男、その傍らには小さな機械のタコがいた。
その数100以上

「貴様がグリードの一人、アंकか？」

男が、アंकに向かって問う

「・・・お前、何者だ？」

アंकが右腕を男に突き出そうとした時だった

「行け、タコカンドロイド」

男の号令とともにタコカンたちはオーズに向かって飛んでいく

「奈々！……！」

奈々の脚に一匹ずつ絡みついていき、速度を減速させる

その隙に残りのカンドロイド達は、自分たちを組み体操のように連結させていく

その形はまるで……

「トランポリンみたいだねえ……」

ある程度安全なところまで減速し、そのままトランポリンの上で解放されるオーズ

ビヨン

トランポリンのように弾み、無事地上へと生還する

「奈々、無事か！」

「ふーん、心配してくれたんだあ？」

わざとらしくいう私

「ハッ！こんなところでやられたら困るんだよ！」

むー、まだ手駒扱いか……

「オーズ！！！」

背後から黒服の人に声をかけられる

あー、【後藤さん】か。ネットだと【誤砲さん】とか言われてたっけ？

「ある方からの【誕生日】プレゼントだそうだ……」

そういつて長細い箱を差し出される

「うわぁ……剣だ……」

青を基調とした剣【メダジャリバー】とセルメダルが数枚入っていた

「おい、なんで人間のくせにメダルを持つてる！？」

アंक、けんか腰は駄目だよ！

「ふん、半端なグリードごときに答える理由は無い！！！」

後藤さんは、踵を返すと自販機をバイク【ライドベンドー】に変形させ、走り去っていく

「じゃあ、さっそく使おうか！！！！！」

原作では、タコカンとライドベンダーを駆使してラストに必殺技を放っていたけど・・・

「私には、私のやり方がある！！！！！！！」

ガシヤツ・・・

セルメダルと3枚投入して、走る

「おい！どうする気だ！！」

「まあ、見ててよ！！！！！！」

タコカンたちが私の後をついてくる、計画通り！

「タコカンたち、でっかいトランポリンになって！！！！！！」

聞き取れない声で彼らはどんどん組みあがっていく

ヤミーのすぐ目の前まで近づくと、ヘッドの力で弱点を探す

「そこか！！！！！！」

バッタレッグで跳躍、タコカントランポリンの力さらに飛ぶ！！！！

眼前にはヤミーの頭

「決めるよ！！！！！！」

オースキャナーでメダジャリバーを読み込む

トリプル！スキャニングチャージ！！！！

そのまま、剣を振り下ろした

ズバンツ

空間が裂け、もう一度戻ると・・・ヤミーのみが爆散した

「またメダルの雨だねえ・・・」

シャワーを浴びるように手を伸ばすと、メダルが体内に浸透していく

「ああ・・・ちょっと気持ちいいかも・・・」

「メダル取りすぎだ！俺のだぞ！！」

アंकとメダルの取り合いをしながら、失ったセルメダルを補充していった

「そういえば、比奈ちゃんは？」

「あ！俺のコア！！」

カマキリコアを奪われたまんまって辛いんですが・・・

キャアー！！！！！！

「あの声、比奈ちゃん!!」

「この感じ、奴か・・・」

え？誰かいるの？まだ私にはグリードの気配を感じれないんですけど・・・

アंकを頼りに進んでいくと、【彼】がいた・・・

「お前か・・・【ウヴァ】」

「久しぶりだなあ・・・アंक」

そこには、グリードの幹部怪人の一人。昆虫の王【ウヴァ】が立っていた・・・というかその手にあるのって・・・

「ウヴァ！俺のコアを!!!」

カマキリコアだった・・・

「ふざけるな！これはオレのコアだ!!!」

ふんツと鼻（し）を（た）ならして体内に入れる

緑色のオーラとともにウヴァの力が増幅したのが分かる

「ッ、あの女余計なことばかりしやがって・・・」

まあ、ヒロインですからねえ・・・

原作にはなかった邂逅・・・さて、どうなるかな・・・

メダル2 妹と自販機と幹部怪人と？（後書き）

あいかわらず薄っぺらいですね。次回こそあれを出したいです・・・

メダル2 妹と自販機と幹部怪人と？（前書き）

昨日から夏休みでした。昨日の時点で完成してたのですが、まさかのフリーズ……。私の2時間を返してほしいです……。

メダル2 妹と自販機と幹部怪人と？

どうしてこんなことになったんだろう・・・

目の前で傷ついていく仮面の戦士Ⅱ（お兄ちゃんをたぶらかしたあの悪女）

「返せ！オレのメダルを返せ！！オーズ！！！」

何度も何度も脚部に狙いを定めて攻撃している昆虫の怪人

「返せ！！！！」

強烈なアッパーが決まり、彼女が宙を舞う

「私が・・・あのメダルを渡したから・・・？」

私は・・・

「お兄ちゃんを助けたかっただけなのに・・・」

「ここまで、力の差があるなんて・・・」

メダジャリバーを杖代わりにフラフラと立ち上がる

「ううッ!!」

ウヴァから強烈な一撃が叩きこまれ、杖代わりのジャリバーも飛ばされる

立ち上がるうえにも、脚に力が入らない・・・

バツタからエネルギーが流れてこない・・・

「正直、甘かったね・・・」

原作みたいなネタキャラとか言えない、これが、これが・・・

「幹部怪人、グリード・・・」

メダルチェンジが出来ないこともないが・・・

あと、極力だがあの【二枚】のコアを使うなよ。奪われたら・・・

「ああ、竜君も無理難題を言ってくれたものだね・・・」

せめて、どこかに隙があれば・・・

迫りくる緑の爪、私はそれを見ぬ間に意識を手放した

怪人が彼女に近づいていく

もう脚もフラフラで立っていることだけで精一杯のようだ

もう一撃貰うと、とうとう立ち上がれなくなったようだ・・・

「このままだと・・・というからお兄ちゃんは？」

私は【お兄ちゃんセンサー】を使って居場所を探す

ピピピッ！

「上?!」

「ウヴァアアア　!!!」

右腕に炎を宿し、ウヴァとか言われた怪人に攻撃する

「アंकか!!」

このタイミングなら・・・

「フッ、お前も甘いな」

ウヴァの双角から放たれる緑光の雷

「うわぁッ!」

アंकがなけなしの力を溜めに溜めて練り上げた炎がサーッと消

えていく

「ツ……クソがあ！」

アंकはもう一度炎を練り上げようとするが……

「アंक、させると思つか？」

右腕（本体）を掴み、爪で外装を削る

「あゝあッ！！！」

鳥の装飾がひび割れ、セルメダルが飛び散る

「！！！」

悪女と赤い腕がやられた……でも好都合かも……彼らが消えてくれれば……

「まずはお前と……お前の憑りついている人間から始末するか……」

ピキッ

アイツ、イマナンティッタ？

「ハッ、お前にここまで苦戦するとはな……」

メダルが足りないだけで……

「お前・・・今【何枚】だ?!」

焦ったようにいうアंक

「あと、【2枚】といったところだな・・・オーズから奪えばリーチだ!」

もう良いだろう?メダルに戻るだけだ・・・

爪を振りかぶる、苦悶の表情を浮かべるアंक

「ここまでか・・・」

「ツの・・・」

私は近くにあった【剣】を振りかざす

そして・・・

「虫頭があッ!!!!!!!!!!!!!!」

袈裟に切り裂いた!

「ウオオオッ!!!!!!!!!!」

予期せぬ背後からの一撃

辺りに飛び散るセルメダル、そして・・・

2枚の緑色のメダル

「！貰ったあッ！！！！」

アंकが泉刑事の体から抜け出し、素早く2枚のコアを奪つ

「！アंक！！貴様あッ！！！！！」

コアを2枚奪われたことでウヴァの外装が消える

「ヤアアアアーツ！！！！！」

さらに比奈のジャリバーによる追撃でさらにセルが排出される

「コアを・・・コアを返せえ　！！！！！！！！！」

自身のコアを奪われたことによる激昂

「ッ、奈々ッ！いつまで寝てる！！さっさと起きろ！！！！！」

いまだ目覚めぬ少女にアंकは叫んだ

起きて・・・

誰かが私を呼ぶ

起きてよ・・・

でも、私の知っている【あの人達】の誰の声でもない

このままだと・・・

【ボク】は【また】護れないよ

また？

これが【ラストチャンス】かも知れないんだ・・・

誰？誰なの？

【ボク】は・・・

私は、【水色】の光に包まれた

ガキインッ

トラクロ でウヴァの爪を防ぐ

「オーズッ!!」

「ハッ、やっと起きたか!」

「……………なんだッ!!」

トラクロ で更なる連撃を加える

「奈々?」

アंकはオーズを見て不信感を覚える

そう、タカヘッドの複眼が【水色】に染まっているのだ

「ボク」が……

「私が護るんだ!!!」

……何かに取り憑かれたように、トラクロ を振るっ

そして……

オーリングサークルから1枚のメダルが排出される

「何だ……あのメダル」

「オーズ・・・お前は一体・・・」

二人のグリードは強烈な違和感を持つ

アंकはメダル、ウヴァはその剥き出しになっている【何か】

その【何か】の正体を知るのもう少しあとの話になる

「ここで使わなきゃ・・・【今】使わなきゃ・・・」

いつ使うんだ!!!!!!

トラコアを外し、新たに出た【パンダコア】を挿入する

「変身!!!!!!」

【タカ】！【パンダ】！！【バツタ】!!!!

オーズは新たな亜種、【タカパンバ】に変身した

「ウオオオオオオツ!!!!!!」

普段の奈々からは想像もできないような声

鷹の目に、大熊猫の剛腕と鋭い爪、飛蝗の跳躍力を備えたタカパンバはゆっくりとウヴァに向かっていく。

「姿が変わったところで!!!!!!」

爪を構え、走り寄るウヴァ

オーラングサークルのパンダが発光し、パンダアームにパンダネイ
ルが展開する

その爪は、トラクローよりも長い

「ハアッ!!」

一閃!

ただの一閃だった

その一撃だけでウヴァが宙を舞ったのだ

「・・・強い」

アंकは新たにメダルを見て素直に思った

「奈々・・・お前一体・・・」

「ウヴァ・・・ここでお前を倒す・・・」

「ただの一撃で・・・オーズ!!!!!!」

スキヤニングチャージ!!!

バツタの力で跳躍、そのままウヴァにのしかかる

「ううッ」

ひるんだところでウヴァを持ち上げ、激しい回転を加える

「オオオオオオオッ!!!!!!」

そのまま投げ飛ばす

これがタカパンバの必殺技【パンダ・ジャイアント・ストーム】である

「はあ、オーズ、アंक……このままでは済まさん!!」

メダルの消費が大きかったのか、未だメダルのこぼれおちる傷口を抑え、退散するウヴァ

「これが……グリード……か」

変身が強制的に解除され、その場に倒れる

またメダルが足りないなあ……そんな事を思いながら今日3度目位になる気絶をするのであった

奈々が気絶したのを確認するとアंकはドライバーにはまっていた
【タカ】 【バツタ】そして【パンダ】を抜き取る

「こんなメダル、俺は知らない・・・」

そのまま三枚のメダルを自身に取り込もうとした時だった

君は、【ボク】に相応しい【器】じゃないね・・・

「何ッ！！！！」

そのまま【パンダ】のみ弾かれ、まるで意志を持っているかのよう
に奈々の【中】に戻って行った。

「パンダ・・・のコアか・・・」

「で・・・」

アंकは突然肩を掴まれる

「あんだ達・・・何?!」

「・・・ッ」

めんどくさいのが残ってたな・・・

アークは気絶している奈々を睨みながら、比奈に節用をしようかどうか迷っていた

そんな光景を一人の男が見ていた

「日向井奈々君・・・いや」

仮面ライダーオーズ

「君はこの【世界】に居てはならない・・・」

そう、呟くと背後に現れた灰色のオーロラを潜り・・・

【オーズ】の世界から消えていった・・・

メダル2 妹と自販機と幹部怪人と？（後書き）

ようやく2話終了です。ただ話に準じていくのもつまらないと思い、次回【あの人】を出します。ネタキャラとして扱われてますが、実はかなりのポテンシャルを秘めているのではないかな？と思ったり・・・。

明日で夏休み終わるんで、それまでに次をあげられたら御の字です！！

メダル3 予言者と英雄と内部分裂と？（前書き）

カザリの出現前に少し脱線させます。折角なんで大きく逸れてみよ
うと思います。無いわとか思わないでください・・・

メダル3 予言者と英雄と内部分裂と？

【カウント・ザ・メダルズ】

現在、奈々が使えるメダルは・・・パンダ×1、カンガルー×2（現在【パンダ】に乗り移ってます）

現在、アंकが持っているメダルは、タカ（自我アリ）、タカ、トラ、クワガタ、カマキリ、バツタ

ウヴァが去ってからどれだけの時間が経ったのか

私は知らない部屋に寝かされていた

「むー・・・眠い・・・」

やっぱり変身した後は、ダルさが残る。セルメダルの消費も著しいし・・・

「アレ？・・・タカコアが無い!？」

パンダとカンガルーは私の【中】に漂っているが、さっきまで使っていたタカコアだけが消失していた。

「うー、アंकかな？」

もともとアंकのコアだし、アイツも自分の体を維持しなきゃいけないのはわかるけど・・・

「だったら、別のコアくれても良いんじゃないかな？」

私はアंकへの不満をぶつぶつと呟きながら部屋を出た。

「んで……」

私の目の前に広がっていた光景は……

「ああ……お兄ちゃん……」

恍惚の表情で兄を見つめる比奈ちゃんと……

「……」

【何か】を諦めた表情のアंकだった

「あの一……」

「ッ……!……!……!」

比奈ちゃんは私に気付くと鬼のような表情で私を睨んだ

「奈々……ようやく起きたか……」

アングの眼が虚ろだ・・・何があったのか・・・

私は彼女の視線を逃れるためにアングに話しかける

「あの後、ウヴァは逃げたの？」

「ああ、お前の【得体の知れない】コアの力で・・・」

アングがギロリと私を見る

「あのコア・・・一体なんだ？俺はあんなモノ知らないぞ！」

うーん、なんとも答えずらいなあ・・・

「そんなことよりも起きたなら出てってよ」

私は景色の一部と化していた彼女を見る

「え？な」

「だってここは、私の家だもの」

ああ、だからどっかで見た覚えがあるのか・・・

「さあ・・・早く！！！！」

比奈ちゃんが私に迫る・・・正直ウヴァよりも怖いです

「まあ待て、比奈」

アंकが比奈ちゃんを制止する・・・いつから名前で呼ぶようになった？

「だって・・・こいつのせいでお兄ちゃんが・・・」

なんかだんだん腹が立ってきたな比奈ちゃんに対して・・・

「さっき言っただろ？奈々が居なければ俺はすぐにも出ていくとな」

アレ？私の気絶している間になんか交渉してたの？

「むー・・・お兄ちゃんの為だからね！！！！」

こうして、相手が不服ながらも私は泉家に居候することになった（私も正直不服です）

「そうと決まればメシだ！奈々、買い出し行くぞ！！」

アレ？アंकあんた味覚って・・・ああ、普通にアイス喰ってるってことは泉さんの体に慣れたってことね

「早く帰ってきてね！！！！お兄ちゃん分が不足しちゃうから！！！！」

アंकが蒼い顔をしながら、アイスを頬張っている。ほんと何があったんだ？

財布が無いとか思ってたけど、ポケット探したら出てきた・・・なんか凄い金額は言ってたけど大丈夫なのかな・・・免許証の名義も私になってるし・・・

「これで部屋を借りたほうが早いんじゃないか？」

アングの言うとおりがも・・・

約30分（かなりアングが時間稼ぎをしました、そこまで帰りたくないか？）で買物物を済ませ、帰路をたどる

「！！！！」

メダルではない、奇妙な気配を感じる

「おい、一応変身しておけ」

アングにタトバのメダルが投げ渡される

「え・・・でも・・・」

来るよ

私の中で【彼】が囁く

目の前に出現するのは、灰色のオーロラ・・・これって・・・

「あの人、かな・・・」

アंकに気付かれないようにつぶやく

出てきたのは、茶色の帽子に茶色のコート、黒ぶち眼鏡のおっさん
だった

「鳴滝・・・さん」

それは、【世界の破壊者】の出現を警告する予言者だった

「日向井奈々、君だね？」

鳴滝さんは静かに私の名前を言った

「この世界に君がいてはならない・・・即刻この世界から出てくれないか？」

鳴滝さんの言葉にアंकが叫ぶ

「あゝあ！？何勝手なことやってんだ！！こいつはオースだ！俺の手駒だ！！俺だけのなあ！！！！」

アंक・・・嬉しいけど手駒とか堂々言つな

「・・・まだ間に合う！！今なら私が、いや【我々】がこの誤った【時】を修正できるんだ！！」

まだ間に合う？我々？

「くどい！！何遍も言わすな！！！！」

アングの怒声が響く

「そうか・・・残念だ・・・」

・・・私何にもいってないけど!?

鳴滝さんの背後に新たにオーロラが出現する

来るよ・・・君と【同じ】人が・・・

私と同じ人?ということとは、【仮面ライダー】かな?鳴滝さんだしね
足音だけが響いてくる

「さて、誰が来るかな?変身!!!」

【タカ】!【トラ】!!【バッタ】!!!

タトバ!タ・ト・バ!タトバ!

薄っすらとその影が見えてきた

と同時に私はガツクリと膝をつく

「奈々!??」

突然膝をついたことにアングが駆け寄る

「どうした!?!まだ攻撃されてもないぞ!?!」

ははっ、アंकは【あの人】のことを知らないからそんなこと言えるんだ……

オーロラから出てきた姿は……【赤い角】【青い複眼】【ベルトに装着されたカブトムシ型のメカ】

「あの人しかない……」

私は仮面の下で涙した……。なんで、なんで貴方が……。鳴滝さんの味方をする!?

「さあ、彼女を倒せ!!!」

「何ですか……。教えてください!!!」

「仮面ライダーカブト!!!!!!!」

【オース】の世界にライダーの中でもトップ10に入るほどの実力の持ち主であり、【カブト】の世界のライダー……。【仮面ライダーカブト】が降臨した

メダル3 予言者と英雄と内部分裂と？（後書き）

トップ10とか私が勝手に決めました、異論は認めます

メダル3 予言者と英雄と内部分裂と？（前書き）

日に日に読んでくれる方が増えて嬉しく思います。VSカプト戦がどのように思われるか分かりませんが、よろしくお願いします。

メダル3 予言者と英雄と内部分裂と？

カブトの出現により、オーズは苦戦を余儀なくされた。

それは、ただ単に【力】の差ではなく【英雄】としての【彼】が何故、【鳴滝】といえるのかという、精神的なものだった。

あの【カブト】・・・【どっち】だ？

彼女はトラクローでカブトのクナイガンを防ぎながら頭を働かせている

彼女の言う【どっち】というのは、【原典世界】の【カブト】である【天道総司】と【リイマジ】の【天堂ソウジ】のことである

出会った時点で【天道語録】が出なかったので、【リイマジ】の天堂である可能性のほうがある程度高い・・・があくまで【現時点】での判断だ。

「ッー」

奈々が頭を使っている間にも、カブトは容赦なく彼女を攻め続ける
ただ、もうひとつだけ彼女には【気がかり】がある

何故、【クロックアップ】を使わないのか？

【クロックアップ】・・・それは【カブトの世界】のライダー全員が使用できる【タキオン粒子】の力による超高速移動法のことであ

る。カブト、【ガタツク】、【ダークカブト】はベルトの右腰部にある【スイッチ】を叩くことにより、【ザビー】、【ドレイク】、【サソード】、【カブティック】、【ホッパー】はベルトの右腰部にあるスイッチをスライドさせることにより発動する。

この力は、彼らの敵【ワーム】（成虫）も使用することができ、使えない者にとってはまるで【時が止まっている】ように感じるであろう。体感的に速くなるのではなく、時間に干渉するものだ。

余談だが、クロックアップよりも高い性能の【ハイパークロックアップ】を使うことで【過去・未来】も自由に行き来できるらしい。

「なんで、まあ・・・使ってこないに越したことない、けどッ!!」

そんなことを彼女が考えながら戦っていることを知ってか知らずか・・・アंकは苛立ちを見せる

「おいッ!!そんな奴、さっさと片付けろ!!」

投げられるメダル、その色は緑色

「お、カマキリか!」

バッタでバックステップし、距離を稼ぐと素早くトラと交換する。

【タカ】 【カマキリ】 【バッタ】

亜種形態である「タカキリバ」にコンボチェンジする

「やっぱり【チーター】欲しいけど・・・まだ【カザリ】に出会っ

てないから仕方ない・・・」

オーズのコンボチェンジを冷静に見ていたカブトが一気に走り寄る

「速さなら、こっちも負けなないよ!!」

カマキリの特性は、素早い連撃にある。また同じ緑色のメダルであるバツタとの相性も良く相乗効果で能力が飛躍的に上がっている。

そして、ヘッドであるタカの力で、相手の隙やダメージに蓄積量もだいたい分かる。

「現時点での最良の亜種だね」

クナイガンを右腕のカマキリソードで受け止め、その一瞬で左のカマキリソードで仕掛ける。

「!!!!!!」

攻撃方法が先程のトラクローの大振りな攻撃とは違う、素早い連撃でダメージを蓄積させる攻め方

それらをカブトは冷静に見ている。まるで、敵の戦法を見極めるために多少にダメージは仕方ないともいうように・・・

「・・・なんか、探られている気がする」

ボク、使わないの？

【中】のパンダコアが話しかけてくる

「貴方を出すのは、ちょっと危険なのよね。トラよりもパワーあるけど、立ち回りづらいし……」

ガアーン……

パンダコアは少しショックを受けたかのようにセルメダルの奥底へと消えていった

あとで、謝らないとダメかな？

そんなことを考えながら、次なる手を考えていると……

「……だいたい、お前の戦法は【分かった】」

クナイガン【ガンモード】に変更し地面に向かって撃ってくる

「ッ！目くらまし！？けど、【タカの眼】はごまかせないよ!!」

タカヘッドの力を最大限引き出し、カブトの姿を探す。しかし……

「どこ！？なんでいないの!?!」

正面、背後、上空……タカヘッドの力を持っても見えない

「そんな……!!」

そこで気がついた……粉塵が【ゆっくり舞い上がっていること】に……

「しゅん……」

もう遅い……!!

そう、クナイガンを連射したときに、カブトは【クロックアップ】をしていた

そして、堂々と【正面】からゼロ距離でクナイガンを放つ

「あぁッ……!!」

大きく後方へと飛ばされる奈々

【clock over】

電子音が超加速の終了を告げる。と同時に、全ての【時間】が正しく歩みを始まる

目の前にいたはずのオーズが、突然自分の遙か後方まで吹き飛ばされているのを見て、アंकは戸惑いを見せる

「ッ……!何だ、アイツの能力は!？」

800年前には確実に無かった【力】、その力の一端にアंकは思考を巡らせる

「これが……」

800年たった人間の力だということのか……

この力を持った目の前のカブトムシに似たオーズ（便宜上そう思っています）が、この【世界】に留まるとしたら……

「グリードは、確実に全滅する……俺が【完全復活】する前にッ
！……！」

ここで奈々に死なれたら、【オーズ】という【手駒】を失ったら……

「ヤバいな……ここで【計画】が狂うのは……」

アंकは、自身の右腕を【グリード】化させ、一枚のメダルを出現させる

そのメダルは鮮やかなエメラルドグリーン……刻まれている生物は、【クワガタ】

「少々【早い】が……」

ここで奈々を失うよりは……マシだッ！！！！

相手の能力が未知数なうえ、先程から戦闘方法も変わっている。不用意にメダルを投げるのは危険だ。なら

「奈々あ……受け取れエー……！！！」

メダルを投げるアंक。それをカブトが見過ごすわけは無かった……

「二度目があると思うか？」

力強く、腰部を叩く

【clock up】

アंकに近づき、腹部目掛けて蹴りを放つ

「威力は【加減】しておいたぞ、グリード……まあ、聞こえては
いないだろうがな」

そして、空中をゆっくりと漂うメダルに近付く

「……なんだ？」

それは【タカ】が刻まれた【セルメダル】だった

「俺には、オーズの持つ力は分からないが……」

手を打っておくか

そのセルメダルを彼らとは違う方向へ投げ飛ばす

【clock over】

「うぐうツ……」

腹部に強い衝撃を受け、のたうちまわるアंक

「あの【銀色】のメダルにどのような力があるか、知らないが……
手は打たせてもらった」

「……ふッ……」

「……何がおかしい？」

カブトは関を切ったように笑うアंकに不信感を募らせる

「そうか、【手は打ったか】……」

舐めるなよ、人間があッ!!!

アंकがそう吠えると、アंकの異形の腕が瓦礫の下に居るオーズの方へと飛んで行った

「!!!グリッドというのは、そんなこともできるのか」

冷静というか楽観的にその様子を見ているカブトだった

「おいッ!!!起きろ!!!!!!」

「あーとーごーぶんー……」

・ 瓦礫の下敷きになっているのに……彼女は良く寝られるものだ……

「ッ！……！……起きろ！……！！！」

思いっきり近くに落ちていた鉄パイプでオーズの頭を殴る

「ッ！……！！……！！……！？……？……？……？……？」

突然の頭部への衝撃に、奈々は仮面の下で涙眼である

「な……に……ずんのよ……！！！」

アंकに対して、涙声で抗議する奈々

「寝てるお前が悪いんだろ！？……良いから、さっさと立て……！！！」

悪態をつきながらも、立ち上がる奈々

「うー……痛い……」

「奈々……アイツ、知ってるのか？」

突然真面目モード（だいたいそうだけど）なアंकの問いに奈々も頭を切り替える

「……知ってる」

「今のお前で【倒せる】か？」

その問いに彼女はうまく答えられない。なぜなら、目の前にいるあの男は彼女の最も【尊敬】する【人達】の一人だからだ

「・・・だけど」

「ん?」

アंकはふよふよと奈々の周りを浮かびながら答えを待つ

「・・・たい」

「声が、小さい。聞こえないなあ・・・そんなんじゃ・・・」

「あの人に・・・たい!」

腹の底から、低く絞り出すように出す声

「どうせなら、アイツに聞こえるように言ってやれえ!!!」

アंकの怒声に感化され、言い放つ!!

「私は、あの人に、【あの人達】に【勝ちたい】!!!!!!」

この世界に来るまでは、【TV】の中でのフィクションだった・・・

けど、私はこの世界に来ることになった、来ることが出来た、オースの力を手に入れた!【あの人達】と同じ道に立つことが出来た!!!

「私の、【物語】は・・・まだ、始まったばかりだ・・・終わりたくない・・・」

終わらせたくない!!!

「ハッ！上出来だ！」

アंकは一言だけ、そう言い放つと、奈々に一枚のメダルを投げ渡す

「これってッ！ウヴァの・・・」

【クワガタ】 コアだった

「これで【コンボ】が出来る」

耐えられるかは、お前の【器】次第だ

彼女はメダルをまじまじと見ながら、考える

メダルを体内に入れないと・・・【暴走】する・・・

「・・・リスクは承知の上だ！やってやる！！」

タカを取り外し、クワガタと入れ替える

そして勢いよくメダルをスキャン

【クワガタ】 【カマキリ】 【バッタ】

ガータ・ガタ・キリツバ・ガタキリバ！！！！

クワガタの力を内包した緑色の双角に橙色の複眼、カマキリの鋭い鎌、バッタの凄まじい跳躍力・・・

まさしく【昆虫の王】に相応しいその風貌・・・オーズ【ガタキリ

バ】コンボが降臨した

太陽の神の名を持つ【カプト】と欲望の王【オーズ】その勝負はまだ始まったばかりであった。

メダル3 予言者と英雄と内部分裂と？（後書き）

寄り道はもう少し続きます。なんかご意見、感想あればよろしくお願ひします！！

メダル3 予言者と英雄と内部分裂と？（前書き）

遅くなりました。いつの間にかオーズも終わり、フォーゼが始まり・
・

まあ、見てる暇ないんですけどね・・・

今回も短いですし、まだカブト戦続きます・・・

もう少しお付き合いください

メダル3 予言者と英雄と内部分裂と？

コンボを使うときの注意点を言いに来た。コンボを使うときは、そのコンボに使う三枚のコアのうち、どれか一枚を体の中に入れておけ。そうすることで、先ほどの戦闘のときみたいな【暴走】が起こらない……

【竜君】の忠告を無視して、行った【ガタキリバコンボ】への変身……私の中で【誰か】が笑った気がした……

「ほう……それが今出来る最良の手、か」

カブトはその双眸でガタキリバを見る

【アイツ】に似てるな……色は違うが……

自分の唯一認めた【彼】のことを思い出していた

「ウオオオオオオオオオオー」

ガタキリバからあふれ出る緑の奔流、深緑の咆哮

「ハッ！！！！」

奈々は自分の中からあふれ出る力に畏怖を感じた

「これが・・・コンボの力・・・タトバの比じゃない！！」

もしかしたら・・・本当にカブトを倒せるんじゃないか？

そんな気持ちすら抱いてしまう

「でも、消耗も激しい。長くは持たないね！！」

奈々は、ガタキリバに秘められた【能力】を解放した

相手の咆哮・・・とても力強い咆哮

「さつさとケリをつけるか・・・」

クナイを構え、ガタキリバに駆けだした

「ッ、【メズール】のヤミーまでは……と思ってたんだがな……」

「アंकは一人で愚痴る」

「まさか、【アイツ】とは違う【物語】を紡ぐとは……だから」

「だから、人間は……」

「アंकは気付いていなかった……自分の顔がほほ笑んでいることを……」

「やはり……彼女は危険だ……」

鳴滝は一人愚痴る

「本来の歴史とは大きく異なっている……ここでオーズが【コンボ】を使うことなんてなかったのに……おのれえ……」

めえ……

ある人物への怒りを露わにしながらも、オーズとカブトの戦いを見

だが、ガタキリバの固有能力【分身生成】・・・最大50体までの分身できるのだ

ただし、数が増えることでその身に受けるダメージは最大50倍になる

奈々は、クワガタホーンで各ガタキリバと連携を図りながら徐々にカブトを追い詰めていく

一体やられても私には致命傷・・・隙を与えちゃだめだ・・・

相手は歴戦の英雄・・・こちらに流れが向いている時にこそ攻めなければ・・・

「ッ・・・クロツ」させるか!!」「・・・」

カマキリソードでクロツクアップの発動を阻止する

「このまま押し切る!!!!」

「・・・まずいな」

この状況を回避する方法を、流れをこちらに引き寄せる方法を考える

が言っていた・・・

「俺が望めば、世界は常に・・・」

俺の味方をすると・・・な

仮面の下で笑みを浮かべ、その動きを止めた

これが、俺の・・・

ガタキリバ達の連撃が効いたのか、カブトの動きが止まる

「！今だ！！！」

全てのガタキリバがオースキャナーを手にする

スキャニングチャージ

バツタレッグでの跳躍、上空からの50体のガタキリバによる連続キック

これがガタキリバの必殺技【ガタキリバキック】だ

「「「「「セイヤー！！！！！！」「」「」「」

「アイツの・・・奈々の勝ちだな・・・」

アंकは余裕の表情で、オーズの勝利を待ちわびた

「・・・なんだ、この妙な感じは」

カブトはその場から動かない

鳴滝は笑みを崩さない

「まさか・・・この状況を崩す手があるのかッ！！！」

目前に迫る50体のライダーキック

カブトは目の前に出てきた手のひら大のオーロラから【何か】を取り出す

それは【銀色の筒】が4つついた兵器だった

「これで、終わりだ」

カブトは、50体のガタキリバに向かって・・・

そのボタンを押した

「・・・なんで、避けない？」

カブトならこの一瞬でもクロックアップが使えるはず・・・

カブトの右手に現れるオーロラ、その手に握られていたものは・・・

「嘘、あれって・・・」

ゼクトマイザー・・・

自分たちに向かって飛んでくる赤い何か・・・マイザーボマーと呼ばれる【クロックアップ】可能な小型爆弾だ

「しま・・・」

カブトゼクター型のマイザーボマーに撃ち落とされていくガタキリバ達・・・

自分が50ならば、相手は無尽蔵・・・いくら小さい力とはいえ、その数が無限ならば・・・

「俺の勝ちだ」

なぜかそんな言葉が聞こえた気がした

ね・・・早く、
わってよ・・・

カマキリヤミーの時に聞いた【誰か】の声・・・今度はノイズが入
ってない・・・鮮明に聞こえる・・・

「誰・・・」

その答えを聞く前に、私は地面に墜落した・・・

メダル3 予言者と英雄と内部分裂と？（後書き）

書いてて思うのは、ダメージ受けて倒れて次回へというパターンが多いということ・・・自分の作品なんで、違和感感じないんですが（多少はありますよ）読んでる人はどう思うんでしょうか？

メダル3 予言者と英雄と内部分裂と？（前書き）

オーズ最終話まで終わったのに、私はまだ3話すら始まっていない状況・・・終わらせられるんだろうか・・・今回でカブト編終わりです。

メダル3 予言者と英雄と内部分裂と？

マイザーボマーによるガタキリバの迎撃は予想以上に上手くいった地に落ちたガタキリバに近寄る

「流石に、立ち上がれない・・・か」

ガタキリバを思いつきり蹴り上げる

「クロックアップ・・・」

現実の時間軸と切り離された一瞬の「時」の中で【必殺】の準備をする

【one】

カプトゼクターを操作し、精神を集中する

【two】

ガタキリバが落ちてくる場所を予測し・・・

【three】

カプトゼクターのゼクターホーンを元の位置に戻す

ゆっくりとだが、ガタキリバが落ちてきた・・・

そして、彼女の命をも奪いかねない【死神の言葉】が紡がれた

「ライダー・・・キック!!」

【rider kick】

右足に集中していたエネルギーをそのまま廻し蹴りで叩きつける

【clock over】

時が動き出し、ガタキリバを中心に爆発が起こる

「奈々あー!!」

アングの叫びが木霊する

パチパチと燃える火粉、拉げた鉄骨、瓦礫の山・・・

「残念だが、もう生きてはいないだろう・・・」

カブトから告げられる非常の一言

「・・・オマエツ!!」

動きづらい体に鞭を打ち、もう一度炎を練り上げる

「無駄だ」

クナイガンから放たれるビームにより、右腕を射抜かれる

「あゝあッ……」

チャラチャラと散らばるセルメダル……もう本体である右腕もボロボロであった

「お前には興味が無い、というより戦う意味が無い……」

あくまで標的はオーズだったということだ……

「それでも、俺の駒を……」

「アイツを道具だと言い切るのならば……」

少々情をかけすぎじゃないのか？

「ッ！」

アंकが顔をそむける

体ももう立ち上がることにすらままならない

「鳴滝、もうオーズは始末した……あとは……!!」

「……どつやら」

カブトと鳴滝は一点を見つめる

「まだ、終わっては無い……か」

先程まで轟々と燃えあがっていた炎は小さくなっていた

その向こう側に、傷だらけになったガタキリバが立っていた

「……ハッ！生きてたか！！！」

アंकクが声をかける、が反応が無い

「おい！……おまえ……」

振り返ったガタキリバの瞳は「橙」ではなく、「黒」だった

「おまえ……なんだ？」

「暴走とは違う……まさか、【前】の……！」

仮面の奥で笑みを浮かべている気がした

「ちょっと、遊んでよ……」

言い終わるか終わらないかのうちにカマキリソードを展開し、カブトに近づいていく

「何度も同じ手を……」

クロックアップをしようと右手を挙げた瞬間……

「グッ……」

戦いで疲労からかその場に屈む

「どーしたの？」

眼前にはガタキリバの刃、その刃の先には【黒い液体】が垂れている

一滴、地面にたった一滴垂れた液は「ジュツ」と小さい音を立てて消えた

「まるで溶解液だな……」

カブトの装甲がいかに【ヒイロノカネ】であるかと、この傷ついた体ではただではすまないだろう

「動かないなら・・・遊んでくれないなら・・・」

要らないよね？

クナイで迫る斬撃を逸らす・・・

「・・・やはり、溶けるか」

クナイの刃は完全に溶かされ、消失した

「これで、終わりだよ？」

ザンッ

カマキリソードによる一刀

「・・・これ以上は、こちらにも不利のようだ・・・」

半ば空気と化していた鳴滝が灰色のオーロラで、カブトとガタキリバを分かち合っていた

「・・・邪魔するの？」

標的を鳴滝に変更する

バツレッグの跳躍で、一気に距離を詰める

「・・・今日はこれで引き上げることにしてよう。また会おう、日向
井奈々君・・・」

次は、【本当】の君自身と会いたいな・・・もちろん【君】ともね・・・
君

そういうと、鳴滝とカブトはこの世界から消失していった

「あいつ等、何言ってるやがる？」

その場を動くことが出来ないアंकはジッと彼らの様子をつかがっていた

鳴滝が彼女に何かをつぶやくと彼らは消えていった

「・・・消えた、か」

正直ホツとしていた

これ以上オーズの変身が続けば・・・

「暴走、するだろうな・・・」

前回、今回の戦闘で分かったこと・・・奈々の中に【何か】がいる

「メダルの気配からして【パンダ】じゃない・・・なんだ？」

アंकは今だ立ち尽くしているガタキリバを見続けていた

「……消えちゃった」

彼女は無感情に言った

遊び相手が消えた。前回もそうだったが、あんな鳥のおもちゃじゃ満足できない……

「もっと、遊びたい……もっと楽しみたい……あの時の……
そう……」

……800年前の事か!?

「フフツ……【私】と【共存】しているのが嫌みたいね。【私】
が前に出ている間は、彼女は出てこれないみたい……いや、もう
メダルが足りないみたいだ。今度は、彼女の意識がはっきりしてい
る時に出てきてみようか？」

そんなことは【僕ら】がさせない!!

「……今も出来てないのに出来るかしら?でも、そのためには、
もっともっとメダルを取り込んでもらわないと……【あなた】達
も【彼】も私が表に出てくることを良くない風に思ってるみたいだ
し……」

……はやく、出て行ってよ……

「あらあら、私も嫌われたものね・・・【同族】のくせに・・・」

【あの時】は【力】も【体】も無かったけど・・・今は違う

「【ソイツ】と体を【復活】させようとしてるのね？自分のこと言えないけど卑怯よね？」

ッ・・・

言いようのない空気が【彼女】と【彼女】の間に流れる

「まあ良いわ・・・」

彼女はゆっくりとアंकの元へと向かう

「こんにちは」

変身を解除して、アंकに挨拶をする彼女

「・・・」

無言で、彼女を睨むアंक

「あらあら、相当嫌われているのね」

フンと鼻を鳴らすと、アングの耳元で囁く

「あなた【達】のやろうとしてる事は、全ての物事を狂わす行為だわ。だから、【私たち】が生まれたのよ？」
別に邪魔しようともしてないけど・・・【この体】を傷つけようとするなら・・・」

【オリジナル】だろうと【消す】わよ？

「・・・どこまで、知ってる？」

流れる冷や汗、奥歯をグツとかみしめる

「そうね・・・例えば、あなたが　　を持っているとか、何故
が消えてしまったのか・・・よね」

アングは眼を見開き、炎を練り上げる

「あー、怖いわあー・・・」

わざと怖がってるふりをする彼女

「オマエ、名前は？」

練り上げた炎を彼女に向ける

「うーん、名前ねえ・・・強いて言っなら」

【ヨグ】いつでも呼んで・・・

「ヨド・・・」

口元で笑みを作り、アंकから離れる

「てつきり【スル】や【ガトル】から聞いているものだと思ったけど?」

「!!!!!!」

ヨドの口から語られる自分の知らない名前・・・だが心当たりはあった

「あの、メダルか・・・」

浮かんだのは、【パンダ】のメダル

「真相は彼女たちに聞きなさい、私もう寝るから・・・」

口元を押さえ、小さく伸びる

「待て!!!!!!」

炎を放とうとするが・・・

「あらぁ・・・傷つくのは、あなたの手駒よ?」

苦虫を潰したような顔をして、炎を消す

「そうそう、良い子ね・・・【アंकちゃん】」

ヨドの人格が消えたのだろう、奈々はゆっくりと地面に倒れた

「俺を・・・その名前で呼ぶな・・・ッ!!!」

傷ついた手駒に、傷ついた自分自身、そして・・・

「【俺】の・・・【俺達】の知らないことがまだまだある・・・か」

やはり、【同じ道】にはならなそうだな・・・

ポケットからiphoneを取り出す

比奈からの着信とメールが1300件を超えていたが、無視しある番号にかける

「・・・俺だ。・・・。。分かった・・・

「短く誰かと連絡を取り、空を見る

「悪いが、俺はグリードなんだ・・・欲しいものは・・・」

この【手】で奪わせてもらっぞ!!!

傷ついた赤い右腕を、欠けた月に伸ばし握る

10分ほど夜風あたり、いまだ目覚めない奈々を背負い、帰路を辿る

「・・・多分、怒られるな・・・」

比奈がカンカンだろうと思ひながら、ブルーな気分でマンションを
目指していった

メダル3 予言者と英雄と内部分裂と？（後書き）

あれ？PM6時くらいに打ち始めたのに、気づいたらpm11時回
ってました。相当数のフラグを立てましたが、これ全部消化できる
のか？というか読んでくれる人完全においてけぼりのような気が
する・・・

また早いうちに打ちますが、気長に待っていてください

メダル4 食欲と試作品とプレゼントと？（前書き）

寝る前にケーキ食べながら打ち込んでる私です。もちろん体重もそれなりにUPしました・・・食べるのが止まらない・・・

メダル4 食欲と試作品とプレゼントと？

【カウント・ザ・メダルズ】

現在、奈々が使えるメダルは・・・パンダ（自我アリ）、パンダ×1、カンガルー×2、?????×?（現在【パンダ】に乗り移ってます）

現在、アंकが持っているメダルは、タカ（自我アリ）、タカ、トラ、クワガタ、カマキリ、バッタ

奈々たちがカブト達を退けたと同じ時刻

「うーん、うまい」

ちよっぴり太めの青年が公園でご飯を食べていた

その量は、常人なら食べ過ぎを更に超えたくらいの量だ

「ああ、なんでこんなにおいしいんだろう」

コンビニの袋に入った最後のコンビニ弁当に手を伸ばし、また食べ始める

そんな青年、腹時門太の様子をジーンと見ている影があった

ライオンのような鬣、虎のような鋭い爪、メタルジャケットのような鎧、脚には鎧は付いていない……

まるで猫科の動物を全て集約したかのような姿、猫獣の王【カザリ】だ

「……人間の欲は凄いね。食べたいが為にあんな量を……うっ
ぷっ……」

カザリはしゃがんで下を向いている

「【食べる】って行為がそもそも信じられないよ……」

ブツブツと門太青年に文句を言いながら近寄る

その手には、虎の描かれた銀色のメダルが握られていた

すぐ背後まで近寄るとメダルの投入口が現れる

その欲望、解放しろ

チャリン

「ぐ、ぐう……」

メダルが投入されるとすぐに包帯のようなものが彼を包み、その姿を変貌させていく

「うう……ううう……」

「さあ、行っておいで・・・己が欲望の為に」

そして彼は、夜の街へと消えていった・・・

「・・・何か言い残したことは？」

所変わって比奈のマンション（比奈ちゃんの所有物ではないですよ？）

「・・・ありません」

「・・・ねえな」

仁王立ち＋黒オーラを發揮している比奈ちゃんと玄関で正座させられている奈々&アंक

「私は「早く」帰ってきたね？って言ったよね？」

「はい・・・（あ、足が）」

「ハッ！妙な連中に絡まれたんだ、しょうがねえだろ！？」

反省する比奈とは反対に突っかかるアंक

だんだんこの状態に苛立ちを覚えてきたのかアंकが立ちあがりかけ……

「もういい！俺は寝」お兄ちゃん……るよ？」ないよ！僕、良
い子だもの！！！」

普段のアंकからは絶対に聞けない言葉が飛び出た

「……………（ぼ、ぼくって）」

笑いをこらえて苦しんでいる奈々がいたりする

「（く、くそお……アイツの怪力さえなければ……比奈の奴は
どこへいっても怪力持ちなのか！？）」

わなわなと震えながら、怒りを消化していく

「二人とも今日はご飯なし！！！」

「「！？」」

驚愕の表情を浮かべる二人

「でもって……」

奈々とアंकからそれぞれ「何か」を持っていく

「この剣と【黄色】と【黄緑】のメダルは預かります！！！」

「ちよつ!」

「おい! コラ! コアメダル持って「ミシッ
い」」

「行ってください」

「アंकさん!」

アंकは原作以上に弱い立場にあるようです・・・

「比奈ちゃん! メダジャリバーとトラコアは良いとして・・・カマ
キリだけは返してくれませんか?」

何気に、ジャリバーとトラさんをデイスる主人公

「ダメ! 反省するまで絶対返しません!」

結局奈々が頭を下げても、アंकが言い寄っても(かなり効果はあ
った)駄目でした

寝室にて・・・

「結局取られちゃったなあ・・・ジャリバー・・・」

【まあいつかは返してくれるよ・・・多分】

しばらくは出てこないと思うよ・・・

「・・・そういえば、さ」

【？】

私の中を漂っている【彼】に聞く

「君の事をなんて呼べばいいのかな？って」

【ああ、僕はね・・・】【スル】っていうんだよ！】

「へえー・・・（原作にはなかったから・・・どうなんだろう）」

その後も、【眠く】なるまでスルと会話をした・・・実はスルは【女の子】らしい（彼とか言ってるってすいません）

【・・・奈々あ？】

「うー・・・なあにい？」

【眠そうだから、明日にするね？】

「うー・・・ありが・・・」

そして、私は深い眠りへと、堕ちていった・・・

おい！起きろ！！

「……………」

？..どうした？

「私が寝ようとするときに、決まって声をかけるのはどうしてですか？」

例の謎の空間で、ちょっとした苛立ちをぶつける

すまない・・・君と連絡を取れるのがこのタイミングしかないんだ

「…………改善して欲しい」

そんなことより、アイツの伝言を無視したな

「アイツ・・・ああ、竜君ですか？」

こんど【直々に】会いに行くって言ってたぞ？

「え……はい……こ、こちらこそ首を洗ってまってるやりますよ？」

大丈夫か！？言葉がおかしいぞ！？

「は……ハハハツ……ちなみに貴方は……」

分からないか？

「【時代が俺に追いついた方】ですか？」

そついう痛いところを突くみたいだね……

その後もいろいろ世間話をした（竜君対策のヒントも貰った）

さて、大分脱線したから戻すけど……アイツ……【天道】
を退けたらしいな

「……」

とても複雑な気持ちだ……世界を守った英雄を訳のわからない状態になったとはいえ、倒してしまったことだ。それに今話している人は、そのライバル……とても複雑なのではないか……

正直、今のアイツはおかしい……近くに居る俺たちですら
そう思う……。でも、あの一緒に居る【鳴滝】さんのせい……

という訳でもないらしい

「え？鳴 さんのせいじゃないんですか？」

え？なんで伏字に！？

「質問を質問で返しちゃいけないですよ？強いているなら、鬱陶しいという意見を貰ったので・・・」

メタな発言は止めて！！！！

そんなこんなで、夜は更けていく・・・え？アंकはって？

みんなが寝静まった時を待ってアイス食べにリビングに侵入して、

【比奈ちゃんとりっぷ】にひっかかったらしくて・・・

「アंकさん・・・朝からどうしたの？」

真っ白に燃え尽きてました・・・

メダル4 食欲と試作品とプレゼントと？（後書き）

ようやくカザリが出ましたけど、口調がよくわからん。読んでいて矛盾が無いようにとか読んでる人がクスリとでも笑って貰えるようにとか考えてますけど、考えてるようじゃまだまだ何でしょうね！

メダル4 食欲と試作品とプレゼントと？（前書き）

皆さんお久しぶりです。私用が重なりなかなか更新に至りませんでしたが。

楽しみにしていた方、お待たせしました。

メダル4 食欲と試作品とプレゼントと？

泉家の朝はとつても「非日常的」でしたby奈々

「アंकウウウー！！！！？？？しつかりしろおおー！！！！！」

【比奈ちゃんらつぷ】に引っ掛かり、塩の柱と化しているアंकをあえて揺する。これでもかというくらい揺すりまくる

ガッ

ぐわんぐわんと揺すりすぎて、後頭部を強打させてしまったことは内緒だ。

「ハッ！・・・俺は・・・」

どうやら現実世界に戻ってきたようだ

「アंक・・・ようやく気がついた？」

まだ頭の中で記憶の整理が出来ていないようで、目の焦点が私に合っていない。

「俺は・・・夜中にアイスを食べようとして、冷蔵庫を開けたら・・・ッ！！！！」

アंकは後頭部を押さえながら呻く

「何だ！？この頭の痛みはッ！？大事なところが思い出せねエッ！」

「!!」

「へ、へええー・・・そんなんですか・・・むりにおもいださない
そうがいいんじゃないですか?」

言葉が棒読み?青い顔をしてる?冷や汗が止まらない?触らぬ鳥に
祟りなしですよ!?

チャリチャリチャリリ・・・

「「!!!!」」

メダルの音がする

「全く・・・朝っぱらからッ!」

「ヒーローに休みは無いだよ!ほら!!行こう!!!!」

アंकとともに泉家を飛び出していく、時刻は朝の6:00になっ
たところだ。

「うおおおおおおおおー!!!!」

今回のヤミーは・・・カザリのか

「何かいつものヤミーと違う・・・」

人にヤミーの包帯？が巻きついているのだ

「よく気がついたな・・・あれは、寄生型のヤミーだ」

確か本編でも、苦戦したよね・・・

「まあやらないと・・・アंक！メダル！！」

「・・・ほらよ」

オースドライバーを装着して、アंकからメダルを受け取る

「ん？」

手のひらを開くと、タカとバツタしかなかった

「アंक？トラさんいないよ？」

「・・・忘れたのか、昨日の事を？幸せな頭だなあ・・・」

昨日？って・・・あー・・・

「比奈ちゃんに取られたんだっけ？」

そうそうメダジャリバーも無いんだよなあ・・・

「しょうがない、【スル】おいで・・・」

【中】にいる【スル】に声をかける

【むう〜・・・なあに〜】

眠そうな返答が返ってきた

「ヤミーだから手を貸してくれない？」

【・・・ぐう】

「起きてえー、お願いだから〜!!!!」

「おい！来るぞ!!!!」

「があああああー」

寄生された青年の口から光弾が放たれる

コンクリートが吹っ飛ぶ

「ああーもう!!!!」

竜君との約束を破ることにする！それしか手は無いし!!!!

「おいでませ！」

ポーンと飛び出てきたのは、淡い黄色のメダル

「ッ、まだメダル持ってたのか！」

「私が【知ってる】のはここまでだよ！変身！！！！」

【タカ】！【カンガル】！！【バツタ】！！！！

全てを見据えるタカが目、カンガルの可能性を秘めた拳、バツタの跳躍力を持つ脚

亜種の【タカガルバ】に変身した

「おおー！このパンチグローブなら！！」

バツタの力を解放して、高く跳ぶ

「ボディ！ボディ！そして・・・アッパー！！！！」

極力生身の部分を殴らず、ヤミー化している部分を攻める

「やはり、光るものは持っているなあ・・・」

アングの眼がオーズの動きを見る

自分の知らない人間、メダル、経験・・・今まで培ってきた全てがこの世界では無意味。

「もっと、この世界の事をッ!!!」

寄生された人間からヤミーが出現した

「アイツのヤミーは厄介だからな・・・早めに片付けないとな・・・」

「

「猫のヤミー、コイツ斬撃が効くんだっけ・・・」

【スル】はお眠むだし、トラとカマキリは無い、自分が乗り移っている【パンダ】を使う訳にはいかないし・・・

「アングー!!なんか手は無いですか!？」

「無い!」

ッ、薄情な奴め!!元はと言えば、お前が比奈ちゃんに頭が上がるのがいけないんだろ!？」

カンガルーの力を引き出し・・・殴る、殴る、殴る・・・

マウントポジションをとって更に殴りつける

ゴス、ゴス、ゴス、ゴス・・・

「ハッ、流石だな！これなら余裕・・・」

ガス、ガス、ガス、ガス・・・

「・・・お、おい」

めき、めき、めき、めき・・・

「・・・やm」もうやめてえー！！！！！！・・・カザリ？」

ネコヤミーを庇うように猫獣系のグリード【カザリ】が現れた

「もうやめてよ、いくらヤミーでも可哀想でしょ！？一方的すぎる
じゃない、慈悲ってものは無いの！？」

「無いし！！！！」

「！！！！！！！！！！」（ネコヤミー含む）

「怪我したくなかったら退いて？その子猫ちゃんともっと玩あそんであげないと・・・」

「（なんかスイッチ入ったー！！！？？）（ふみゃーん！？）」

そうして、一方的な可愛がり（という名の遊び）が更に始まること
していた。

バチツ・・・

触れてはいけない空気感を破る小さな音

その場にいた全員が音の方を向く

「・・・君が、オーズか」

その男は、全身黒ずくめ。そしてサングラスをかけていた

「誰だ・・・」

「ただの・・・人間じゃないよね？」

「・・・にゃん」

「喋るな・・・」

（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）ガクブルガクブル

「・・・って、あの人は!？」

男はサングラスを外し、ゆっくりとオーズ達に近づく

「俺の名は……」

剣崎一真、またの名を……

懐から拳大の機械【ブレイバツクル】とカードを取り出し、ベルトを形成、レバーを引く

「仮面ライダーブレイドだ……」

金色の【オリハルコンエレメント】を潜りぬげると、金色の鎧を纏った剣の王が君臨していた

「仮面ライダー？」

「ブレイド……」

「……一言でも喋ったら死ぬ……」

「剣、崎……さん」

13体のアンデットをその身に取り込んだ英雄が欲望の世界に降り立ったのだった

メダル4 食欲と試作品とプレゼントと？（後書き）

剣崎さん降臨！一番好きなライダーです！！

ネコヤミーは奈々のサンドバックになりました・・・
睡眠時間を削りながら、打ち込んでいきます・・・

あ、比奈ちゃんだしてないや・・・ちなみにまだ寝ている時間です

メダル4 食欲と試作品とプレゼントと？（前書き）

何故このタイミングでブレイドを出した？と友人に聞かれ、「好きだから」と言った。

「何にも考えてないんだね・・・」
「・・・」

今度から考えて書くようにします。

メダル4 食欲と試作品とプレゼントと？

その場を支配するのは、静寂と黄金の殺気

その身に纏うのは、13体の種の祖であり不死の生命体【アンデット】

その手に握るのは、黄金の重醒剣と蒼紺の醒剣 双つの覚醒器

そしてその心に宿すのは

「オーズ・・・君はこの世界に居てはいけない」

ブレイド・キングフォームは諭すように訴える

「俺が剣を振るう前に、この世界を去ってくれないか？」

威圧するようにキングラウザーをオーズに突き立てる

「おい！この間の事といい・・・お前ら、邪魔なんだよ！」

アンクがブレイドKFとオーズの間割って入る

「・・・お前が【カプト】の報告にあったグリード・・・アンクか」

ガンッ

キンググラウザーを地面に突き立てる、アスファルトは砕け散りながらキンググラウザーを受け止める

「話の邪魔だ・・・お前から消す・・・」

ブレイラウザーを逆手に構え、体制を低くする

「上等だッ!!」

炎を練り上げ、放つ

「アंक！駄目d・・・」

あッ？

「な・・・んで、お・・・れ・・・が・・・」

渾身の炎だった、なのに・・・

アंकは自身すら気づかぬうちに、宙を舞っていた

「確かに、ダイヤのカテゴリー6に匹敵するくらいの炎だった……」

ブレイドKFはゆっくりとオーズに近づく

「だが、俺には効かない……そう……」

【今】の俺には、ね

「俺は、カブトのように手加減もしないし、する気もない……」
ブレイドKFは後方にあるキンググラウザーを引き寄せると、オーズ
に向き直る

「さあ、答えを聞こう……」

最初から本気なのは分かっていた、多分あのブレイドKFは
【ディケイド】の軸から来た……はずだ……

アंकが重傷、メダルチェンジするメダルも無い……それに、コ
ンボすらできないのに……最終フォームに勝てるわけがない……

「……ッ」

考えている間にブレイドKFが近づいてくる

考えろ、考えろ、考えろ……最良の、何かあるはずだ……

ブレイドKFは眼前に迫っていた

「さあ、聞こうく……!?!?」

問いかけてきたブレイドKFを何かが吹き飛ばしていった

「これは……風?」

黄色い竜巻……ってことは!?!?

ねえ、人間の分際で僕を無視しないでよ

完全に空気と化していたカザリ(とネコヤミー)がブレイドKFに攻撃を加えた

ただ、全くと言っていいほどダメージは無い

「お前らも邪魔をするのか?」

ヒュン

蒼紺の剣がネコヤミーに突き刺さる

「に、にあ……」

爆散、メダルの雨が降り注ぐ

「オマエ、僕のヤミーを倒して……ただで済むと思っているの？」

爪を構え、ブレイドKFを威嚇する

「言っているだろ？邪魔する奴は……」

倒すってさ

キングラウザーを振りかざし、カザリに斬りかかる

「アंक！しっかりしろ！！」

メダルを適当に掴み走り、アंकに落とす

「う……ああ……」

ダメージが酷い、多分カプトと戦った時以上だ……

「メダルさえ・・・ブレイドKFに対抗できなくても、退けるぐらいの力があれば・・・」

目線の先には、袈裟に切り裂かれるカザリの姿があった

「う・・・そ・・・ただの・・・人間に・・・」

ジャラララララ・・・

下半身がすでにメダル化した

「お前らグリードは所詮ただの【メダル】の塊だ・・・それを司っているメダルを斬れば・・・」

消えるだろ？

「!!!!!!」

嫌だ

黄金の刃が迫る

死にたくない、消えたくない

僕は・・・

ガキイン・・・チャララ・・・、ピチャ・・・

金属音と何かが垂れる音

「痛ッ・・・」

キンググラウザーとカザリの間に分身の体をねじ込んだのだ

「・・・何故だ？」

「なんで・・・僕を・・・」

二人からの問い

「私にも分かんないよ・・・でも、何も・・・消えることは無いんじゃないかな？消えたら、悲しいんじゃない？だからあのネコヤミーが消えた時に起こったんじゃないの？」

肩で息をしながら答える

「ブレイド・・・さっきの答え、言うよ・・・」

「私は消えない・・・だって、これは・・・」

私の物語だから・・・私だけの!!

「ヤミー達も、私の中に・・・メダルとして生き続けているんだ・・・だから!!」

そうか

ブレイドKFはもう一度キンググラウザーを振り上げる

「消えてくれ、・・・の為に!!」

800年ずっと考えていたことがある

何故僕らは造られたんだろうか？

必要無ければ造らなければよかったのに・・・

造り物だったとしても擬似的なものでも・・・

【命】なんていらなかったのに・・・

僕に与えられた名前は【飾り】

自分を着飾ることではしか彼らと向き合えない・・・

でも、こんなに真っ向から自分と向き合ってくれた奴が・・・今ま

でいただけるうか？

僕は、一人を好んでいるんじゃない

僕には自分の居場所というものが自覚できないんだ・・・

だから、信じれない。だから、裏切られたんだ・・・

でも・・・今回のオーズなら・・・僕を・・・

「オー・・・ズ・・・」

消えそうな意識を必死に繋ぎとめる

「カザリ・・・今助けるよ・・・」

ああ、この【王】はなんてお人好しなんだろう・・・

だから、【アंक】が引かれたんだろうか・・・

「ふふッ・・・どうせ消えるんだ・・・でもこのまま消えたくない、よ・・・」

そう、終われない・・・

「新たなる【王】よ……君に……」

僕をあげるよ……

「カザリッ！！駄目！！！！」

霧散し、メダルの山へと変わるカザリの体……そこから浮かんできたものは……

「コアメダル……それも【七枚】も」

「お別れは済んだか？」

振り下ろされる刃

メダルを掴み、避ける

「……まだ消えてないよ……カザリは、まだ生きてる」

人格の宿っているであろう、【ライオン】のコアを掲げる

「正直もう立っているのも辛いけど……このメダルを取り込んだら……」

多分、貴方を打ち負かすよ？

「行こうか……カザリ！！」

宙へ投げるコアメダル、それをその身に受ける

まるで最初からその場に収まるかのようにスウーとオーズの体に溶け込んでいった

ドックン

「これからよろしくね、カザリ・・・」

「・・・傷が、癒えた・・・だと？」

理解できないというような素振りでも何度目かになるキンググラウザーを構える

「【剣の王】よ・・・貴方にも勝るとも劣らない・・・」

灼熱の獣王の力を見せてやる!!!

ドライバーから全てのメダルを取り外し、新たな3枚のメダルを投入する

「変身!!!!!!!」

【ライオン】! 【トラ】!!! 【チーター】!!!!

【ラッタ・ラッタ・ラットラーター!!!!!!!】

あふれ出る熱波、黄金の鬣に青空のような鮮やかな青の双眼、虎の鋭い爪、チーターの脚力を内包した脚・・・

猫獣の王、ラトラーターが降臨した。

メダル4 食欲と試作品とプレゼントと？（後書き）

ラトラーターの変身声がよく分かんないので適当です！そしていき
なりのカザリ退場！！メダルが増える＝奈々強くなる。

賛否両論あるんだろうな・・・一応考えてます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2221v/>

ライダー少女が世界を巡る

2011年10月19日02時01分発行